

政務調査報告

# 子どもたちと一緒につくる 地域コミュニティー

—主体としての子ども，“子ども”でつながる地域—



2013 年 3 月 31 日

## 目次

|                                                                      |    |
|----------------------------------------------------------------------|----|
| はじめに .....                                                           | 1  |
| <b>第1章 データで見る子どもの現状</b> .....                                        | 5  |
| <b>第2章 子どもの参画による地域づくりに関する他市事例</b> .....                              | 11 |
| <b>第3章 主体としての子ども</b> .....                                           | 14 |
| 3-1. 子どもと一緒につくるということ<br>／NPO 法人京都子どもセンター 青年部 KAMONASU .....          | 14 |
| 3-2. 少年は必要とされてはじめて大人になる／塔南の園児童館 .....                                | 18 |
| 3-3. こどもがつくるまち（京都）／ミニ京都実行委員会 .....                                   | 23 |
| 3-3-1. こども City ミニ京都 .....                                           | 23 |
| 3-3-2. こども City ミニ京都@らくさい .....                                      | 28 |
| 3-4. こどもがつくるまち（全国）／『こどもがまちをつくる』<br>日本におけるこどもがつくるまちのひろがりと特色ある事例 ..... | 32 |
| <b>第4章 「子ども」でつながる地域</b> .....                                        | 35 |
| 4-1. 子どもを軸に地域で連携～ふれあいフェスタ～<br>／NPO 法人京都八幡こどものひろば .....               | 35 |
| 4-2. 地域が子どもの育ちに関わる～「町たんけん」から見えること～<br>／NPO 法人山科醍醐こどものひろば .....       | 38 |
| 4-3. 表現する喜びで身近なひととつながる<br>／新大宮こどもの基地実行委員会 .....                      | 43 |
| 4-4. 地域に豊かな福祉を築く<br>／NPO 法人フォーラムひこばえ .....                           | 46 |
| 4-5. 地域拠点としての学校（開かれた学校）<br>／一般社団法人洛峰ココイマプロジェクト .....                 | 49 |
| <b>第5章 “子どもと一緒につくる” ために</b> .....                                    | 55 |
| おわりに .....                                                           | 58 |
| 執筆担当 .....                                                           | 59 |

## はじめに

### 本報告の目的および構成

#### 社会背景

地方自治の改革にとって、市民参画が重要な鍵となるのは自明である。すなわち、自治体は、様々な主体が参画意識を高め、社会課題の解決策となる活動を生み出せるような「参画の環境整備」を重点課題とする必要がある。

京都市では、2010（平成 22）年 12 月 10 日に策定された「はばたけ未来へ！ 京プラン（京都市基本計画）」に、都市経営の理念として「生活者を基点に、参加と協働で地域主権時代を切り拓く」と謳われている。この理念の前段に、「（計画の位置づけとして）単なる『行政計画』ではなく、市民と行政が共に汗を流して協働する『共汗型計画』」の一文があることから、京都市における都市経営の主人公は“市民と行政”であると読み取れる。

この「市民」とはどのような人のことであろうか。「京都市市民・参加推進条例」（2003 年）には、市民についての明確な定義は無い。しかし、前文に「21 世紀においても、京都が有する多様かつ豊かな蓄積を輝きに変え、個性豊かな魅力あふれるまちとして、京都が発展し続けるためには、事業者、市民活動団体等を含むすべての市民が、その持てる力を存分に発揮し、地域社会の一員として、自覚と責任を持って、まちづくりを進めるとともに、市政に積極的に参加し、協働の成果を挙げることが必要である。」と謳われていることから、「市民」とは地方自治法に定める「住民」（市内に住所を有する人で、外国人市民や法人を含む）以外に、地域社会の一員として生活しあるいは活動をおこなう個人や団体をひろく含むものと考えられる。

それでは、「子ども」はどうだろうか？

「子ども」とは、「児童の権利に関する条約（子どもの権利条約）」（1989 年）において第 1 条本文の規定により、『児童（子ども）』とは『18 歳未満のすべての者』をいい、18 歳の誕生日を迎えるまでのすべての者が児童の権利に関する条約の適用を受ける。」とし、子ども（18 歳未満）の権利について包括的に定められている。条約は、子どもを「保護の対象」としてではなく、「権利の主体」としている点に特色がある。国際人権規約（1976 年）で認められている諸権利を子どもについて広範に規定し、さらに、子どもの自己決定権、あるいは自己決定する主体となるための権利としての解釈がされる意見表明権（第 12 条）をはじめ、遊び・余暇の権利（第 31 条）など、この条約独自の条項を加え、児童の人権尊重や権利の確保に向けた詳細で具体的な事項が規定されている。

この理念に照らして考えれば「子ども（18 歳未満の者）」も、自らの自由な意思で地域社会の一員として活動をおこなう「市民」であると言える。

しかしながら、近年活発に取り組まれている地域コミュニティの再生・創造の活動において、子どもが主体(担い手)として参画する事例は、残念ながらごく限られたものである。

## 子どもの参画

本報告書で、子どもの参画について「どのような状態を参画というのか」を考える指標として、ロジャー・ハートによる「参画の梯子」(図1)を紹介する。

「子どもは、社会の構成員として、市民として、大人のパートナーとして地域づくりに主体的に参画する能力があり大人にはない力を発揮する。」とロジャー氏は示唆する。氏の著書「子どもの参画—コミュニティづくりと身近な環境ケアへの参画のための理論と実際」(ロジャー ハート, 2000)には、ユニセフのプロデュースによる世界各地の豊富な事例を提示し、子どもの参画の理論とその具体的な方法論が詳しく紹介されている。<sup>1</sup>

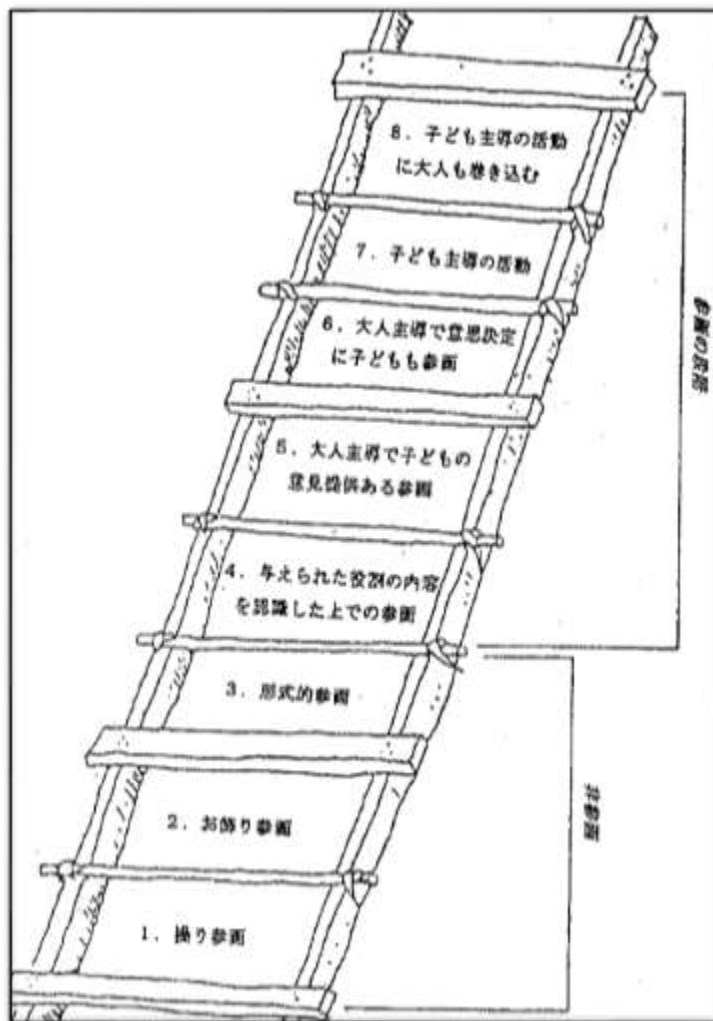


図1

### 〔解説〕

#### 1. 操り参画

「欺き参画」ともいう。取材などで画面に子どもの絵が欲しいために、子どもをお菓子でつって画面に登場させ、視聴者には「子どもも参加していますよ」というメッセージを送るような場合。

#### 2. お飾り参画

子どもをだましてはいないが、子ども自身は意味を分かっていない場合。デモ行進などで子どもに「原発反対」と書いたTシャツを着せているような場合。

#### 3. 形式的参画

「子ども議会」などでよくあるケース。子どもに市長に質問させる。しかし、質問項目のシナリオが与えられていて、事後もそのことを取り上げないような場合。

以上、1～3は子どもが十分意味を分かって参画していないので、参画とはいえない。

#### 4. 与えられた役割の内容を認識した上での参画

そのプログラムについて意見を言ったり決定に参加することはできないが、とにかく何のためにやっているかは子どもは分かっている。

<sup>1</sup> ロジャー・ハート『子どもの参画』42頁。なお、図版の関係で翻訳が異なる箇所がある。

学校が行う街頭募金活動などによく見られる。また、子ども歌舞伎などの伝統行事にもよくあるケース。

5. 大人主導で子どもの意見提供ある参画  
子どもは少なくとも意見をいうことはできる。決定権は大人が握っている場合。
6. 大人主導で意思決定に子どもも参画  
子どもは意見を言い、最終的な決定を大人と子どもと共同で行うケース。
7. 子ども主導の活動  
子どもが企画し、運営し、評価をする。学園祭などの出し物ではこのケースがよく見られる。子どもの普段の遊びはほとんどがこれに相当する。
8. 子ども主導の活動に大人も巻き込む  
学園祭で子どもたちが寸劇を作り、ある場面に先生にも出てもらうようなケース。ハートの参画論は、子ども主導の活動よりも、大人を巻き込む活動を上位に置いていることに特徴がある。

ハートは8段階目をめざして欲しいが、ケースによって4以上であればよい、とも言っている。  
3以下の「非参加」は絶対に避ける必要がある。

## 本報告の目的

本報告では、地域コミュニティの再生・創造が多様な主体の参画によってすすめられることを願って、その公正な一員として「子ども」の存在が位置付けられるよう、子どもが主体となって取り組まれた先駆的な活動や子どもの存在を軸にして地域が連携する事例を紹介し、京都市あるいは他都市において子どもの参画が推進されるよう提起する。

子どもの参画推進にあつては、子ども自身が真に主体性を発揮できるよう、「子どもの力を信じる、待つ、ありのままを受けとめる」姿勢や、その姿勢を事業の中に取り入れた地域づくりがすすめられることを期待するものである。

## 構成

第1章では、調査機関が実施したアンケート結果等から見えてくる全国的な子どもの現状を共有する。次に第2章では「子どもの参画」をとりいれた他市事例を参照する。第3章は「主体としての子ども」と題して、様々な活動の中の子どもの姿を見ていく。あわせて子どもの参画をすすめる環境づくりについて工夫する支援者の視点や、地域のおとなが子どもから受ける影響を紹介する。続く第4章は、子ども支援・まちづくりの事例において、“子ども”をキーワードに様々な人や組織、資源がつながりをつくりだす可能性を示す。

第5章では、前章までをふまえ、子どもをパートナーとして地域づくりをすすめるために必要な視点を考察し、今後の課題と展望を明らかにする。

## 調査主体

本報告書は特定非営利活動法人京都子どもセンターが各事例主催者の協力を得て作成す

る。

尚、第 3 章と第 4 章は、各事例の主催者に執筆依頼または聞き取り調査を行った。

## 第1章 データで見る子どもの現状

子どもの気持ちを、おとなはとらえているか？

本章では、アンケート結果等から見えてくる全国的な子どもの現状を共有する。

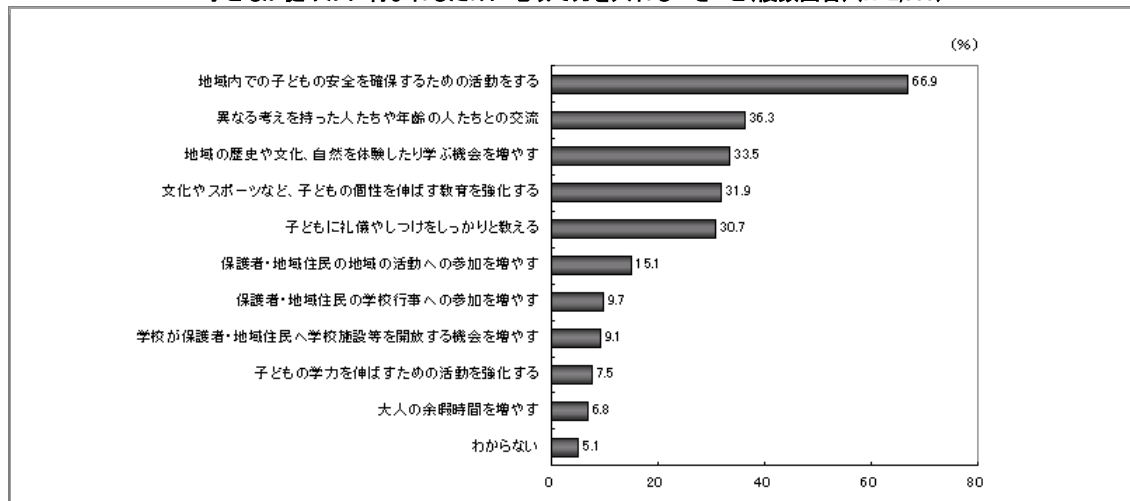
### 1-1. 地域に期待されること

子どもと地域に関する全国的な実態は、2005(平成 17)年度に文部科学省が株式会社日本総合研究所に委託して実施した「地域の教育力に関する実態調査」に詳しい。「子どもが地域社会に見守られながら伸び伸びと育つことができる環境の整備に資するべく」詳細な調査・分析がされた中から、「子どもたちと一緒につくる地域コミュニティー」の前提として、保護者が「子どもが育つ地域」に対してどのようなことを期待しているかを見てみたい。

#### 子どもを育てる上で、地域において力を入れるべきこと

保護者に対し、子どもが健やかに育まれるように地域で力を入れるべきことをたずねたところ、「地域内での子どもの安全を確保するための活動をする」(66.9 パーセント)が他の項目を大きく上回る高い割合となっている。また、「異なる考えを持った人たちや年齢の人たちとの交流」、「地域の歴史や文化、自然を体験したり学ぶ機会を増やす」、「文化やスポーツなど、子どもの個性を伸ばす教育を強化する」「子どもに礼儀やしつけをしっかりと教える」などについて、いずれも3割以上の回答率となっている。

子どもが健やかに育まれるために地域で力を入れるべきこと(複数回答)(N=2,888)



子どもが健やかに育まれるために地域で力を入れるべきであると保護者が考えることについて、上記グラフの項目の中から考えに近いものを3つまで選択。注)調査時期は平成 17 年 10 月～11 月中旬

文部科学省「地域の教育力に関する実態調査」2 調査結果のポイント, (2) 地域の教育力“低下”を感じる保護者より

下位となった項目は、保護者・地域住民自身の関わりを促すとも読みとれ、それが影響して明らかな回答数の差につながったとも考えられる。しかし全体的には、地域は安全を最優先に、子どもが様々な体験を通じて社会と関わる場であってほしいとの期待が読みとれる。



## 1-2. 子どもの意識の変化

次に、子ども自身の意識や生活・地域に対する期待を見てみたい。博報堂総合生活研究所が2007(平成19)年10月に発表した「子供の生活十年変化」アフターバブル・キッズ徹底調査に、1997年と2007年を比較して、日本の子どもの意識と行動の変化がまとめられている。

結果発表の冒頭には「増やしたい時間は「睡眠時間」が約65%。「時間」「いい成績」「自由」が欲しい子供たち。」という概要と、「今の子供たちは、学校で緩やかな「関係」を確保、家でしっかり「休息」を確保、興味関心の中で「自我」を確保と、“暮らしの3点確保”を意識し、バランスをとって生活しています。社会の閉塞期でもある「失われた10年」に生まれ育った子供たちゆえの特徴です。」という要旨がある。

また、調査対象とした小学5年生～中学3年生の世代(2007年時点)を「アフターバブル・キッズ」と名付けて、いわゆる「バブル崩壊」後に学童期を迎えた彼らの成長過程には、「3つの特徴的な社会的背景がある」ことを挙げている。

| 【参考資料】                                                                                              |                                                    |                                                    |
|-----------------------------------------------------------------------------------------------------|----------------------------------------------------|----------------------------------------------------|
| アフターバブル・キッズ(1992～97年生まれ)の子供の成長過程には、大きく3つの特徴的な社会的背景があります。バブル後の時代の閉塞感の中で、子供を取り巻く環境が激しく変化した時代といえるでしょう。 |                                                    |                                                    |
| ①更なる少子化(1クラス人数の減少。1人の子供への期待・関心増大。)                                                                  |                                                    |                                                    |
| ②ITによる情報爆発(生まれながらのデジタル世代。携帯やインターネットで情報が溢れる。)                                                        |                                                    |                                                    |
| ③ゆとり教育の導入(ゆとり教育によるゆとりの減少。週休2日で塾や習い事が増加。)                                                            |                                                    |                                                    |
|                                                                                                     | 1997年の子供                                           | 2007年の子供                                           |
| 年少人口<br>(0～14歳)                                                                                     | 2001.4万人<br>(1995年生計調査より)                          | 1752.1万人<br>(2005年生計調査より)                          |
| 全人口比                                                                                                | 15.9%<br>(1995年生計調査より)                             | 13.7%<br>(2005年生計調査より)                             |
| 子供1人<br>当たり大人数                                                                                      | 5.29人<br>(1995年生計調査より)                             | 6.30人<br>(2005年生計調査より)                             |
| 10～14歳<br>人口                                                                                        | 733.7万人<br>男/375.6万人<br>女/358.1万人<br>(1995年生計調査より) | 600.8万人<br>男/308.0万人<br>女/292.8万人<br>(2005年生計調査より) |
| 1クラス生徒数                                                                                             | 小学校/28.4人<br>中学校/33.3人<br>(1995年学校基本調査より)          | 小学校/25.9人<br>中学校/30.4人<br>(2005年学校基本調査より)          |

「アフターバブル・キッズ」は、ゆとりなき“ゆとり教育”世代。

Q あなたがほしいものは何ですか？ (複数回答可)

|      | 1997 | 2007 | 変化   |
|------|------|------|------|
| お金   | 59.6 | 54.8 | -4.8 |
| いい成績 | 44.9 | 54.0 | +9.1 |
| 時間   | 26.1 | 35.6 | +9.4 |

10年間で「時間」「いい成績」「自由」が欲しい子供が増加。欲しいもので最も多くの子供が答えたのは1997年も2007年も「お金」。10年の時を経て、大幅に伸びた回答は、3位「時間」(26.1%→35.5%)、2位「いい成績」(44.9%→54.0%)、4位「自由」(26.6%→33.0%)でした。勉強や日々の生活では、ゆとりの減少が窺えます。

Q もっと増やしたいのはどんな時間ですか？ (複数回答可)

|             | 1997 | 2007 | 変化    |
|-------------|------|------|-------|
| 睡眠時間        | 61.7 | 64.9 | +3.2  |
| 友達と過ごす時間    | 63.5 | 61.9 | -1.6  |
| ぼんやり過ごす時間   | 22.7 | 31.9 | +9.2  |
| テレビを見る時間    | 38.7 | 29.0 | -9.7  |
| 勉強をする時間     | 18.8 | 26.0 | +7.2  |
| 家族と過ごす時間    | 20.6 | 25.0 | +4.4  |
| テレビゲームをする時間 | 29.9 | 19.8 | -10.1 |

増やしたい時間のトップは、1997年「友達と過ごす時間」から2007年「睡眠時間」に。約65%の子供が増やしたいと答えた「睡眠時間」が、97年の1位「友達と過ごす時間」を抜いてトップになりました。また大きく増えた回答は、「ぼんやり過ごす時間」(22.7%→31.9%)「勉強する時間」(18.8%→26.0%)など。一方で「テレビを見る時間」(38.7%→29.0%)「テレビゲームをする時間」(29.9%→19.8%)の回答が大幅に減少したのも特徴的です



Q あなたの今の年齢やお金、時間のことを考えに入れなくて、また親に叱られることもないとしたら、あなたは次の中で何をしてみたいですか？

|                   | 1997 | 2007 | 変化   |
|-------------------|------|------|------|
| デパートで好きなものを買って歩く  | 53.5 | 47.0 | -6.5 |
| 毎日遊園地で遊ぶ          | 37.4 | 37.3 | -0.1 |
| 好きなスポーツをし続ける      | 27.9 | 34.5 | +6.6 |
| 世界中へ冒険の旅へ出る       | 35.1 | 30.4 | -4.7 |
| いろいろなテレビゲームをし続ける  | 30.1 | 26.5 | -3.6 |
| 山のように本を買って読みつづける  | 15.7 | 22.8 | +7.1 |
| 日本中のレストランを食べて回る   | 20.7 | 17.5 | -3.2 |
| 好きな楽器を演奏しつづける     | 9.9  | 11.0 | +1.1 |
| 砂浜に毎日寝転んで過ごす      | 9.9  | 10.8 | +0.9 |
| 彫刻をしたり絵画や小説を書き続ける | 7.7  | 5.8  | -1.9 |

興味があるのは「好きなスポーツをしつづける」「山のように本を読みつづける」が増加。

「今してみたいこと」で、10年間で最も大きく伸びたのは、「山のように本を買って読みつづける」(15.7% → 22.8%)。ついで「好きなスポーツをしつづける」(27.9% → 34.5%)が増加しました。1997年に比べ、“自分作り”に意識して励む2007年の子供たちという印象です。

博報堂総合生活研究所「子供の生活十年変化」  
アフターバブル・キッズ徹底調査

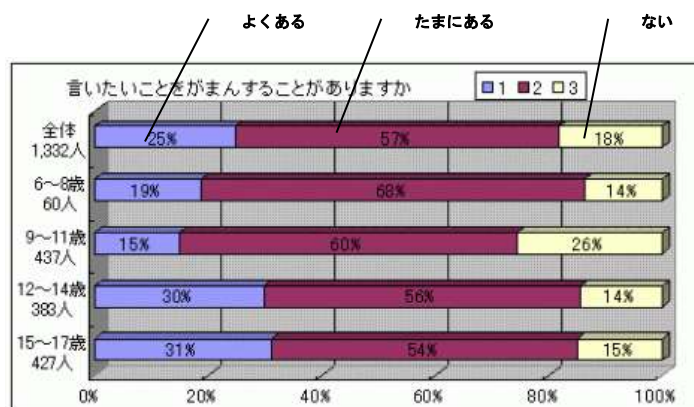
～1997年と2007年、日本の子どもの意識と行動はどう変わったか？～ より

吹き出しで示したのは、博報堂総合生活研究所の分析結果である。同じ項目で大きくプラス（またはマイナス）があった点についてコメントしているが、あわせて10年前と順位が変わった項目も見てほしい。夢中になれることの質が変化しているようにも感じられる。

現在は調査の実施からさらに5年が経過し、子どもの生活はさらなる経済・学力・体験の「格差の拡大」が指摘されている。本調査の範疇を超えるが、「貧困」という経済的な問題が学習面や社会体験の格差をうみ、地域から孤立している子どもの存在があることに触れておきたい。

### 1-3. 子どもと保護者の意識・感覚の違い

博報堂の調査と同じ2007(平成19)年に、千葉県が子ども(小学4年生～高校2年生)と保護者を対象に実施した調査結果からいくつかを紹介する。



←問 4-1-1 (子ども) あなたは、家庭や学校で言いたいことをがまんすることがあります。

80%の子どもが「がまんすることがよくある・たまにある」。99%の保護者が「子どもの意見をよく聞いている・少しは聞いている」。この認識のズレがあるこ

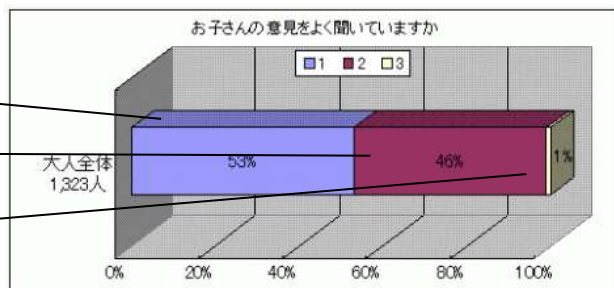
とを受けとめて、本調査の前提としたい。

→問 4-1-2 (大人) あなたは、ふだんお子さんの意見を聞くようにしていますか。

よく聞いている

少しは聞いている

聞いていない



#### 問 5. 子どもの自尊感情と自己肯定感について

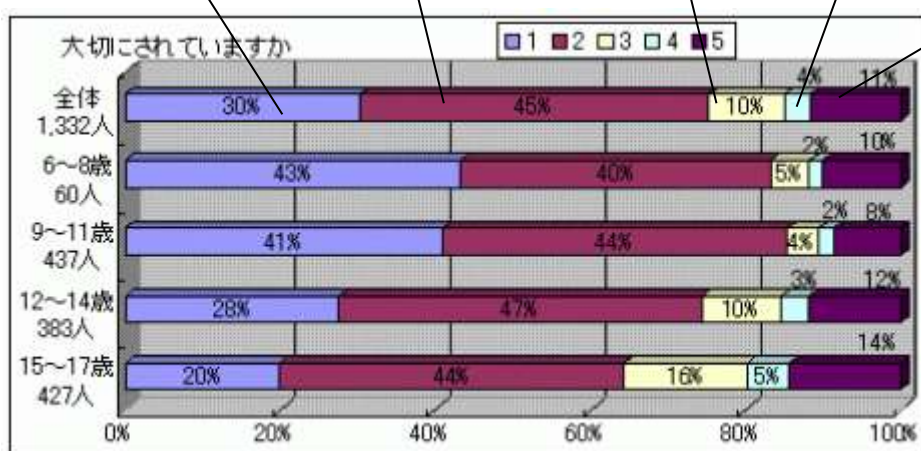
いつも感じている

ときどき感じる

あまり感じることはない

まったく感じない

わからない



問 5-1-1 (子ども) あなたは自分が大切にされていると感じますか。

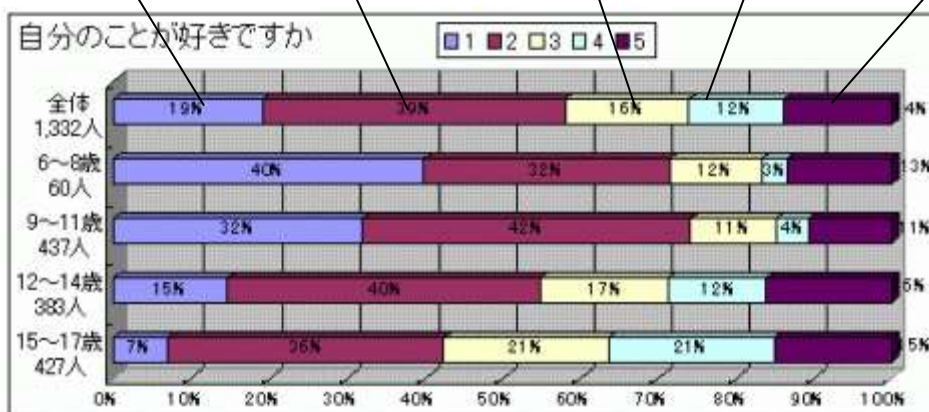
好き

まあまあ好き

あまり好きではない

好きではない

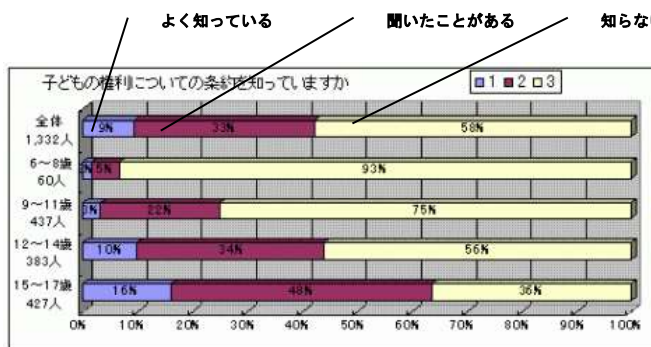
わからない



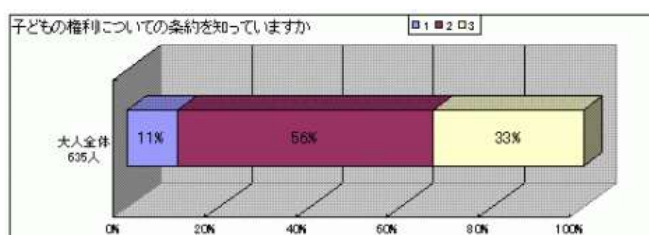
問 5-2-1 (子ども) あなたは自分のことが好きですか。

日本の子どもの自己肯定感の低下は、ここ数年、いろいろなところで指摘されているが、年齢が高くなるにつれて「大切にされていると感じられない」「自分を好きではない」とする回答が増えていることは見逃せない。また、「大切にされているといつも感じ／ときどき感じ」ていても「自分のことをあまり好きではない／好きではない」という子どもの存在が読みとれる。

## 問 6. 「子どもの権利条約」の認知度について



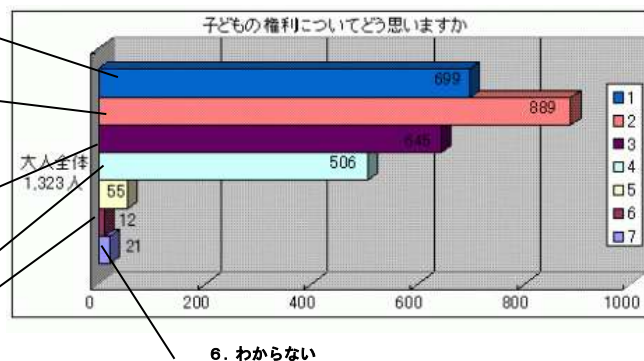
問 6-1-1（子ども）あなたは、子どもの権利について国際的な条約があることを知っていますか。



問 6-1-2（大人）あなたは、子どもの権利について国際的な条約があることを知っていますか。

## 問 6-2-2（大人）あなたは、「子どもの権利」についてどう考えますか。（いくつでも）

1. すべての子どもに等しく「子どもの権利」があるということを、子どもたちにきちんと伝えなければいけない
2. 子どもは、自分自身の「子どもの権利」が尊重されることにより、他の人の権利を尊重することや「人権」の大切さを学ぶべきである
3. まず、おとなが、一人ひとりの「子どもの権利」を守ることが大切である
4. 子どもに権利ばかり教えるとわがままになるので、同時に義務や責任も教えないといけない
5. 義務を果たせない子どもに権利はないと思う



この調査が、2009(平成 17)年 3 月、これまでの子育て支援策に加えて、「子どもと若者の権利・社会参画の推進」等幅広い施策を盛り込んだ「千葉県次世代育成支援行動計画」にもとづいて、千葉県が計画推進のために設置した「子どもの権利・参画のための研究会」によって 2011(平成 19)年に実施した調査であることを指摘しておきたい。

つまり「子どもの参画」において、行政が先進的行動を起こしている地域であっても、子どももおとなも「子どもの権利」の認知度や権利についての意識は充分ではないと言える。

様々な調査結果から、この 10 年で「安心安全」に対する危機感の高まりを受けて、「地域に子どもの居場所を作らなければならない」という意識や取り組みは急速に広がっていることがうかがえる。しかし、それぞれの場が本当に「子どもの居場所」となり、「子ども

の参画を推進する」ものになるかどうかは、今後の実践にかかっていると言えよう。

本章で参考にしたデータの出典

株式会社日本総合研究所

文部科学省委託「地域の教育力に関する実態調査」, 2010. 3 月

[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo2/003/siryou/06032317/002.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo2/003/siryou/06032317/002.htm)

2 調査結果のポイント, (2) 地域の教育力“低下”を感じる保護者

博報堂生活総合研究所

「子供の生活 10 年変化」, 2007. 10. 31

<http://www.hakuhodo.co.jp/pdf/2007/20071031.pdf>

千葉県「子どもの権利・参画のための研究会」

子どもの意識・実態調査, 2011. 2. 22 更新

<http://www.pref.chiba.lg.jp/jika/jouhoukoukai/shingikai/jidoukatei-2/ishikityousa.html>

財団法人日本青少年研究所

高校生の心と体の健康に関する調査ー日本・アメリカ・中国・韓国の比較ー, 2011. 2 月発表

<http://www1.odn.ne.jp/youth-study/>

⑧自己評価

データ収集：土江 京  
ま と め：竹内 香織

## 第2章 子どもの参画による地域づくりに関する他市事例

本章では、子どもの社会参画に関する国の方針と施策を確認し、全国の事例を紹介する。

### 2-1. 子ども・若者に関する国の施策

政府の、子ども・若者に関する施策は、「子ども・若者白書」<sup>2</sup>の平成23年度版「特集」に青少年育成推進本部の取り組み経過が詳しく掲載されている。

[http://www8.cao.go.jp/youth/whitepaper/h23gaiyoupdf/pdf/gaiyo\\_b2.pdf](http://www8.cao.go.jp/youth/whitepaper/h23gaiyoupdf/pdf/gaiyo_b2.pdf)

子ども・若者育成支援推進法の施行を受けて策定された「子ども・若者ビジョン」(2011.07.23策定。以下「ビジョン」)には、基本的な方針として以下の5つの理念が掲げられている。

- ① 子ども・若者の最善の利益を尊重
- ② 子ども・若者は、大人と共に生きるパートナー
- ③ 自己を確立し社会の能動的形成者となるための支援
- ④ 子ども・若者一人一人の状況に応じた総合的な支援を、社会全体で重層的に実施
- ⑤ 大人社会の在り方の見直し

また、この理念を実現するための3つの重点課題として、以下の3項目が挙げられている。

- ① 子ども・若者が生き生きと、幸せに生きていく力を身につけるための取組
- ② 困難を有する子ども・若者やその家族を支援する取組
- ③ 地域における多様な担い手の育成

「ビジョン」には、すべての子どもを対象とする重点施策として

- 基礎学力の保障等、高校教育の質の保証
  - 社会形成・社会参加に関する教育（シティズンシップ教育）の推進
  - 子ども・若者の意見表明機会の確保
- が挙げられている。

### 2-2. 子どもの参画を推進する条例等

#### ●子ども議会の開催事例

**市議会** 131件／786市

参照：全国市議会議長会、「市議会の活動に関する実態調査」, 2012.09（平成24年度版）

<http://www.si-gichokai.jp/official/research/jittai23/pdf/jittai231231-26.pdf>

- ・ 兵庫県宝塚市：年1回開催。2012(平成24)年度で第13回を迎えた)
- ・ 佐賀県武雄市：本議会の議長が進行し、答弁は市長はじめ各担当部長から行なう

<sup>2</sup> 子ども・若者白書 子ども・若者育成支援推進法（平成21年法律71号）第6条の規定に基づき毎年国会に提出することとされている年次報告書。法定白書として、今回が3回目の作成（昭和31年から作成している青少年白書（非法定）と通算すれば54回目の作成）。内閣府 HP より [http://www8.cao.go.jp/youth/suisin/pdf/s\\_law.pdf](http://www8.cao.go.jp/youth/suisin/pdf/s_law.pdf)



- ・ 島根県海士町
- ・ 京都府木津川市：同志社大学のPJと共同で実施

**町村議会** 116 議会／932 町村議会（748 町議会，184 村議会）

参照：全国町村議会議長会，「町村議会実態調査結果」，2012.07.01（第58回）

<http://www.nactva.gr.jp/html/search/pdf/1-1-58.pdf>

●子どもの権利条約等を実施する自治体 84 件（内、総合条例は26件），2011.01

参照：国際NGO・特定非営利活動法人子どもの権利条約総合研究所

[http://homepage2.nifty.com/npo\\_crc/pdf/kodomo\\_kenri\\_jyorei.pdf](http://homepage2.nifty.com/npo_crc/pdf/kodomo_kenri_jyorei.pdf)

### 2-3. 子どもの参画を推進する事例(文部科学省HPより)

●福岡県春日市立春日西中学校 コミュニティスクール

コミュニティスクールとは？

コミュニティスクールは、学校と保護者や地域の皆さんがともに知恵を出し合い、一緒に協働しながら子どもたちの豊かな成長を支えていく「地域とともにある学校づくり」を進める仕組みです。

コミュニティスクールには保護者や地域住民などから構成される学校運営協議会が設けられ、学校運営の基本方針を承認したり、教育活動などについて意見を述べるといった取り組みがおこなわれます。

これらの活動を通じて、保護者や地域の皆さんの意見を学校運営に反映させることができます。（引用：文部科学省HP）

●春日西中を要する西中ブロックコミュニティの学校運営協議会の「共育」目標

「地域とともに生きていく児童・生徒の育成」

- 学びに進んで取り組む児童・生徒
- 心豊かな関係を作ろうとする児童・生徒
- 地域に係ろうとする児童・生徒

地域及び地域の人と主体的にかかわり、コミュニティスクールの運営に携わる取り組み

- ・ ボランティア隊

（小学校での小学生との交流、中学生による小学生のためのサマー寺子屋、地域の夏祭り・餅つきへの参加、野菜作り・草取り体験）

- ・ 整美委員の生徒・先生、地区のボランティア協働による緑化運動

●ふじさわこどもまちづくり会議 <http://fujisawa-kodomo.org/>

目的

「ふじさわこどもまちづくり会議」は、自分たちの生活する「まち」について考えるきっかけを提供するワークショップです。子どもたちが自分の住む町に愛着が持てること、自分の意見を発言しほかの人の意見を聞くことができる協調性を養うこと、また発想力豊かな子どもたちの意見を目の当たりにすることで大人たちも心動かされることを目的としています。

#### 手法

毎年一回、藤沢市内の一地区を選定し、小学生を対象に行っています。

こどもたちはまず、

- ① 身近なまちの自然環境やまち並みをタウンウォッチングで体験します。
- ② 地域の人から歴史を聞き、実際にまちを“観ること”によりこどもたちが感じたことを整理し、具体的にどのようなまちにしたら良いのかをみんなで話し合います。
- ③ 最後に、自分たちが考える理想のまちの模型制作を通じて、ビジュアルに表現します。

スタッフはボランティアにより構成され、市内外の大学生を中心に色々な方面の社会人スタッフで運営をしています。

本章の調査を担当した大学生は次のような所感を述べている。

- ・ 子ども議会は、形式的・イベント的なものにすぎないのではないか？
- ・ 地域の問題や課題について知り、疑問をもつという意味で、子どもらにとっては大きな経験になる。が、それを実際の施策に落とし込むには壁があると感じる。
- ・ 議会に参加する子どもはごく一部。苦しい立場にある子どもたちの意見は反映されていないのではないだろうか。
- ・ 子どもの意見表明って何だろう？
- ・ （地域版の）子ども条約は、理想・理念を謳い、どれも似たものが多いように思う。

確かに、Webを検索しただけでも数多くの事例が紹介されており、一見子どもの社会参画、地域コミュニティづくりへの関わりは十分に推進されているように見える。

しかし、学生の素直な感想にあるように「形式的、イベント的なものにすぎない」「どれも似たようなもの」と感じる要因はどこにあるのだろうか。

ここで見てきた課題については、第5章で考察したい。

データ収集：土江 京  
ま と め：竹内 香織



### 第3章 主体としての子ども

本章では、様々な活動の中の子どもの姿を見ていく。あわせて子どもの参画をすすめる環境づくりについて工夫する支援者の視点や、地域のおとなが子どもから受ける影響を紹介する。

#### 3-1. 子どもと一緒につくるということ

～第2回東北子どもボランティア KAKEHASHI の活動事例から～

／NPO法人京都子どもセンター 青年部KAMONASU

#### KAKEHASHI とは

京都子どもセンターには、KAMONASU という子どもが主体となる活動を企画運営し実施している青年部がある。

高校生以上、おとな未満…だと思っている人が集まり、春には「KAMONASU 大運動会」、夏には「無人島一週間チャレンジキャンプ」、さらに「夜久野で農業体験」や「京都部」など、子どもと一緒に実に多彩な「やりたい」を企画し実施運営している。

京都子どもセンターでは、KAMONASU の活動を子どもの社会参画の推進事業、あるいは、子どもたちの「今」を受けとめ支援する人材や環境をひろげる「生活文化環境の推進事業」と捉えている。

「KAKEHASHI」は、そんな KAMONASU が一昨年の東北大震災の後、京都の子どもたちと一緒に自分たちのできる支援はないだろうかと考え、企画し実施してきた活動である。

第1回目は震災から8か月ほど経った、2011年11月18日～20日。

小学4年生から中学3年生までの子ども10名と大人4名、KAMONASU スタッフ11名で陸前高田市にある知的障がい者入

所更生施設「ひかみの園」と介護老人保健施設「松原苑」でのボランティア活動を体験した。

第2回子ども東北ボランティア KAKEHASHI は、2012年11月22日～25日。

子ども19名、スタッフ14名が参加し、前年度お世話になった「松原苑」と仙台市榴岡児童館を訪問した。



## 子どもとつくる企画

### 子ども会議

第2回 KAKEHASHI 隊長 池田君は、2011 年の活動は KAMONASU の青年が怒涛の



ように企画し進めた活動だったと言う。その 2011 年の振り返りのワークショップでは、子どもたちから「被災地の同年代の子どもたちと話がしたい」「被災地で出会った人にまた会いにいきたい」などと、青年たちが驚くくらいたくさんの意見が出てきたそうである。

第2回 KAKEHASHI では、その子どもたちの想いを大事にして、子どもたちから出た意見を取り入れ「子どもたちと一から作っていこう」と、スタッフは企画の段階から子どもたちと一緒に作りあげる取り組みを進めた。

では、子どもたちと一緒につくるとは、どういうことを指すのか。

参加者説明会は 10 月 20 日。すでに、受入れ団体への交渉を終えてはいるものの、出発までの一ヶ月の間に、子どもと一緒に何ができるのかを探すには僅かな限られた日程であった。

その限られた日程の中での特筆すべきスタッフの工夫と努力がある。

まず、「子ども会議」を出発前に 2 回開催している。

この 2 回の「子ども会議」の中で、子どもたち自らが、一緒に企画をつくったと実感を持ってもらうにはどうしたらいいのか、そのために、スタッフが、どこまで子どもを巻き込み、一緒につくったと言える実感をもってもらえるのか、確認しておくべきことは何なのか、スタッフは悩み、更なる会議を重ねている。

「子ども会議」において、彼らが大事にしたこと。

東北で「何をしたいのか」という活動の目的をスタッフ間で共有し、それをベースに、子どもが互いの意見を尊重し、出しやすくする工夫をする。子どもたちの「いいね」と思える意見、企画はそのまま採用する。無理と思える意見が出ても「なぜ無理なのか」の過程を一緒に考える。以上の 3 点だった。



その結果、2 回目の子どもの会議では、高齢者との一対一の対話や、模造紙を使った巨大な色紙のプレゼント企画。また、被災地の子どもたちが元気になり、その子どもたちが家に帰って楽しかった気持ちを話すことで、ご家族も笑顔になっていただきたいという思いから考え出された「運動会」企画などが練られ

た。

そこには、「楽しむだけでは何も変わらないかもしれない、それでも何かしたい」「東北



の子どもたちみんなが笑顔になってほしい」という子どもたちの想いが尊重され、意見が反映される企画となって、子どもたちが一緒につくりあげていることを実感できる会議が進められていった。

報告書では、これらの自分たちで考えた企画によって、高齢者や児童館の子どもたちに喜んでもらえたこと、楽しんでもらえたことが、子どもたちの言葉で生き生きと語られている。

3回目の「子ども会議」は、報告会に向

けての活動の振り返りである。

「行く前の気持ち、活動中の気持ち、活動後の気持ち」の3項目について振り返り、子どもたちが主体となる報告会の発表方法についても話し合っている。さらに、報告会当日、報告会直前の準備では「活動を通して伝えたいこと」「行く前と変わったこと」「京都に居てもできること」について意見を出し合い、子どもたちと一緒につくる報告会となっていた。活動が終わってから報告会に至るまでに、何度ものスタッフ会議が行われたのは言うまでもない。

### 「待つ」ということ

実は、3回目の子ども会議が順調にいったわけではない。

活動当日から振り返りまでの間が空いたことや、子どもたちが自分の心境を言葉にして表すことの難しさを感じ、どんなにスタッフが準備してあっても、なかなか意見が出なかったという。

言い過ぎてもスタッフの意見になるのではないかと、待ちすぎても何も出てこない、というジレンマの中で、KAKEHASHIのスタッフは、子どもたちの言葉が出てくるのをじっとりと待ったという。

### 地域とつながる子どもの力

KAMONASUの活動は自らも子どもと一緒に楽しむというのが信条である。しかし、この「第2回東北子どもボランティア KAKEHASHI」では、スタッフが子どもたちのサポートに徹し、子どもたちの意見がでやすい工夫、条件を整え、子どもが思ったこと感じたことを素直に出せる場をつくるために、実に多くの時間を割き、準備していることがうかがえる。

子どもたちは自分の意見が尊重されたという実感を持ち、それが企画となって実施されることの充実感、達成感を得られ、未来を考える力、生きる力を育んでいく。

つまり、KAKEHASHI での体験が、子どもたちの成長に大きな影響を及ぼしたことは疑いの余地はない。

しかしながら、実は、不安な気持ちを抱えているスタッフの青年たちが、子どもたちの想いに触れ、子どもの「できるよ!」という何気ない一言に力づけられ後押しされてもいた。

「初対面でも安心感を感じられる場があれば、子どもたちの力を借りて、子ども同士で笑顔になれる。子どもたちを見ただけで高齢者も元気になる。子どもにしかできないことがある。」スタッフの池田君の言葉である。

まぎれもなく、子どもたちの力を借りてスタッフも成長していたのである。

報告会での保護者からの感想に、「子どもをスタッフとして扱ったのか、参加者として扱いたいのか見えづらかった」というご意見をいただいている。

子どもと一緒につくる企画ならば、もっと子どもたちをスタッフとして扱ってもいいだろうというエールとしてのご意見と受け止めている。

しかしながら、一面では、第2回東北子どもボランティア KAKEHASHI のスタッフは、子どもたちが主体となって活動するためのサポーター（支援者）であり、子どもたちと地域をつなぐコーディネーターであったと言えるのではないだろうか。

今回の活動で、KAMONASU のこのサポーター力、コーディネーター力は大きくなったと言える。

地域と子どもをつなぎ、子どもたちが地域の中で生き活きと活動するとき、青年と言われる世代のサポーター力、コーディネーター力は欠かせないことになる。

子どもたちの成長過程において、子どもたちの身近にこのようなサポートをする大人（学生）と、様々な活動体験があることによって、子ども自らが考え、社会に積極的にかかわろうとする「市民」として成長していくことを今回の事業が物語っていると考えられる。まさしく、京都子どもセンターがミッションとして掲げる子どもの社会参画機会の環境を整えることと符合する。



インタビュー お話：池田昂平さん  
聞き手：竹内香織  
田中貴子  
まとめ：田中貴子

### 3-2. 「少年は必要とされてはじめて大人になる」

～若者が活動を通じて育つプロセス～

／塔南の園児童館

「若者がボランティア活動を通じて成長する」ということは、世間ではもはや当たり前のこととして語られるようになった。体験学習、福祉体験などを含め、私達の活動へ参加する青少年は増加している。しかし、その一方で、様々な動機を持ってやってくる青少年達が、単なる体験で終わることなく、「自分達の活動」として参画し、しっかりと他者や地域課題と向き合える様になる為にはどうしたらよいのか？ということが大きな課題になってきている。若者が地域で輝くことができるためのコーディネートとは何か。「最近の若者は…」とぼやくのではなく、若者が育つプロセスについて、自らの活動への省察を通じて考えたい。

塔南の園児童館

〒601-8445 京都市南区西九条菅田町 4-2

TEL. 075-662-2761 FAX. 075-662-2765

E-mail [tounan@kyo-yancha.ne.jp](mailto:tounan@kyo-yancha.ne.jp)

<http://www.kyo-yancha.ne.jp/tounan/>

#### 小さな児童館にボランティア 200 人

私の勤務する塔南の園児童館は、京都市南区にある小さな児童館。中学校区を範囲とした小地域において、0 歳から 18 歳までの子ども達や親子と関わりを持ち、それぞれの持つ課題や悩みに向き合いながら活動を展開している。事業内容は、乳幼児の親子を対象とした子育て支援、学童クラブ事業、障がいのある子どもへの支援、中高生の居場所作り事業など幅広く、そのすべての事業に大学生を中心とした若きボランティアの参加を得ながら実践している。

「子どもが豊かに育つ環境とは、職員の直接的な関わりのみでなく、様々な人々による関わりがあって作られるべきだ」という考えのもと、これまで積極的にボランティアの募集と受け入れを行い、ボランティアの参画が進む事と並行して児童館の活動が拡大し、充実してきた。しかし同時に、活動に参加する若者の数は増えて来たが、数回のかかわりで活動を終えてしまう人や、表面的なかかわりから発展しないまま去ってってしまう人も、かなり増えてきている、ということも事実である。

#### 「一期一会」のボランティア？

塔南の園児童館での 2006 年度のボランティア受け入れ総数は 210 人。受け入れ全体の 74% が若者のボランティアである。そのうち、一

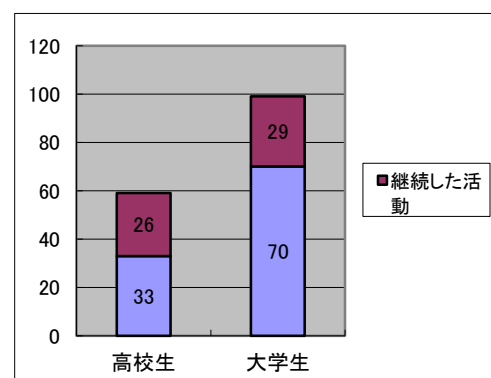


表 3-2-1



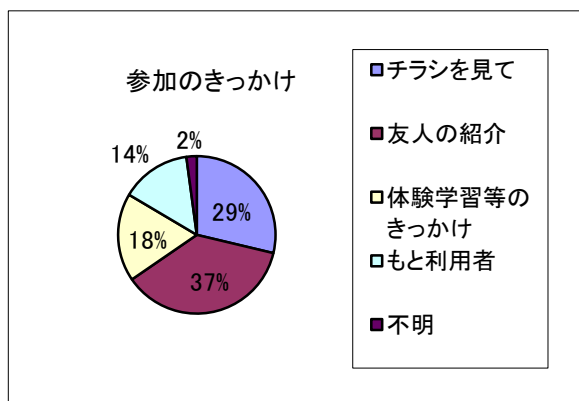


表 3-2-2

して参加、友人に誘われて参加、体験学習などをきっかけに参加、など活動の入り口に立つきっかけは様々であるが、最初の動機と活動への継続にはそれほど関係性が見られない。体験学習などで、活動した証

| 参加のきっかけと<br>継続の関係 | 中学生～大学院生年代<br>合計 189 人 |       |        |     |
|-------------------|------------------------|-------|--------|-----|
|                   | 総数                     | 単発の活動 | 継続した活動 | 継続率 |
| チラシを見て            | 54                     | 34    | 20     | 37% |
| 友人の紹介             | 69                     | 42    | 27     | 39% |
| 体験学習等のきっかけ        | 34                     | 24    | 10     | 29% |
| もと利用者             | 27                     | 17    | 10     | 37% |
| 不明                | 4                      | 4     | 0      | 0%  |

表 3-2-3

定期間<sup>3</sup>継続して活動に参加したボランティアの割合は、高校生が26人（44%）大学生では29人（30%）という結果であった。【表 3-2-1】 継続的に活動に参加する割合はおよそ35%程度ということになる。次に、参加のきっかけと継続との関係について見てみよう。【表 3-2-2, 3-2-3】 募集のチラシを見て自ら連絡

をもらいに来て去っていくという学生も多いが、それでも、そうした入り口の中からも継続的に参加するようになった人も確実にいて、継続率については、他の入り口からの参加者とあまり差はないものであることがはっきりとした。<sup>4</sup>

それでは、継続率が低い理由は何か。当児童館では、兼任ではあるがボランティアコーディネーターを置き、受け入れの際には必ず丁寧にガイダンスを行うようにしている。同様に活動後のふりかえりも必ず行う。かなり忙しい現場なのだが、そこには時間と労力をかけるようにしている。それでも、継続して参加する若者は少ない。

### やってみないとわからない！

私達は、「若者が短い期間の気軽なボランティアをすることで成長する」と考えているわけでは決してなく、そうした「ボランティアを経験する人が増えること」をゴールにしているわけでもない。しかし、どんなきっかけであれ、活動の入り口に立つ機会が増える事は歓迎する。問題は、その入り口に立った若者達を、いかに体験だけで満足させずに活動

<sup>3</sup> 独自に「1年間で12回以上の活動（体験学習期間を除く）」と定めて整理した。

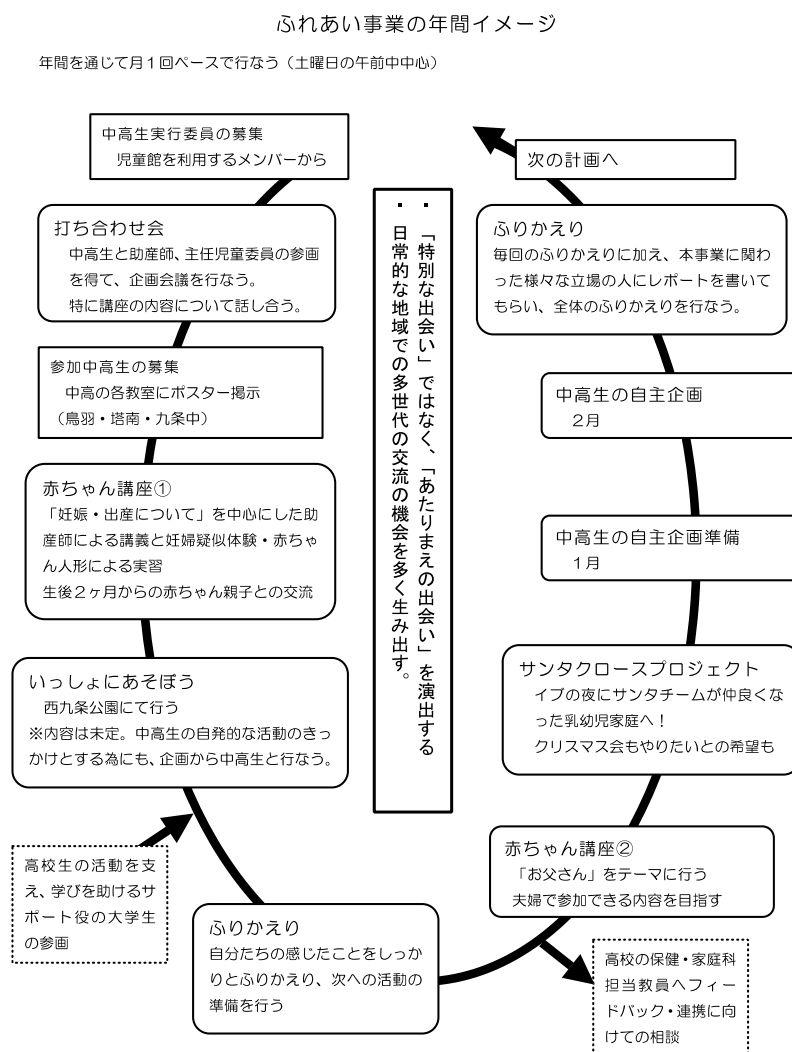
<sup>4</sup> この分析作業は立命館大学ボランティアコーディネーター養成講座のインターンシップ生と共同して行った。感謝！

の核心へと引きずり込んでいくか、という事だろう。そうした仕組みは、丁寧な受け入れとその工夫だけでできるものではなく、若者達が主体となって活動するボランティアプログラムをいかに生み出し、支援するのか、ということにあると考える。学校を通じて活動の入り口に来る仕組みは広がったが、若者が傍観者的ではなく、他者に必要とされる主体者として活動するようになる為の仕組みを、我々の現場サイドからもっと発信していかなければいけない。

若者が傍観者的にではなく、主体者として活動に関わっていくようになるプロセスについては、中高生を対象としたプログラムを実施する中で強く感じられる。そうしたプログラムの1つである「中高生と赤ちゃんのふれあい事業」を紹介したい。

このプログラムは地域の中高生を対象に、児童館で実施している乳幼児親子に向けた子育て支援事業と組合せて仕掛けている取り組みであり、一年間継続して参加できるようにプログラムを構成している。(図1)

図1





### 変化していくかわり

毎年のことであるが、最初は中高生への働きかけに苦勞する事が多い。若者達が活動後のふりかえりの場で、思いを出し合ったり、相手に伝えようとしたり、分かち合ったりすることは極端に少ない。ただ「楽しかった」「大変だった」などの表面的な意見が多く、活動の中でどんな事を感じ、自分はどう思っているのか、という事はなかなか話せない。自分の気持ちを表現することへのためらい、中高生同士での過剰な気の遣い合いは、我々が思う以上に強い。それは、活動の場面に限らず、普段の中高生との関わりの中でも感じることだが、他者との深い関わりを作る事を怖がったり、避けているようにさえ思う。こうした若者の特徴は活動への深い関わりへの壁になっているかもしれない。

その為、我々は、そういった中高生同士の関わりを丁寧に見ていきながら、活動とふりかえりの繰り返しの中で、役割を持って関わる場面を設定したり、思い切って企画を中高生自身に任せたり、時には半ば強引に誘ったりしながら、プログラムのマネジメントに力を注ぐ。



クリスマスイブの夜に行っている「サンタクロースプロジェクト」ではそのマネジメント力が問われる象徴的な場面が多くある。これまでに会った乳幼児親子の家庭に、中高生がサンタチームを組んで訪問するというプロジェクトだが、その準備に1ヶ月以上をかける。中高生をチームに分けて、それぞれに責任を持ってもらい、訪問する子どもの親から、どんなサンタがいいのかという希望や願いを直接聞き取り、子どもの前で行うパフォーマンスの練習を各チ

ームで行う。「中途半端なサンタでは夢を壊すよ」と私達からもプレッシャーをかけられる。前日のリハーサルで上手く出来ずに泣き出してしまう中学生もいた。そして、いろいろあったの当日。我々は緊張した表情の中高生を送り出したら、後は児童館で活動のOBである大学生と共に、中高生には内緒のパーティーの用意をしながら、ドキドキしながら中高生の帰りを待つ。大学生は「中高生のふりかえりの場면을演出する」ボランティアである。

そして、中高生達が達成感に満ちた表情で帰ってくると、我々は大げさに彼らをねぎらう。そして、食卓を囲みながら、訪問した時の気持ちを自分の言葉で語ってもらう場面では、子どもが泣いてしまって戸惑った事、親御さんにとっても喜んでもらえた事、それぞ



れの気持ちがいつもよりたくさん飛び出し、その気持ちへの共感の声もあがる。このいつもと違うコミュニケーションは、なにより自らの責任で他者と関わる活動を作るプロセスから生まれ、当日までの不安や緊張、チームでの効果、イブの雰囲気、サンタやトナカイ衣装による仮装の効果とパーティーの演出によって発展したのだろう。その結果として得られた自己肯定感や役立ち感は、また新たな活動を生み出す原動力となる。

### 若者の可能性！

中高生に限らず、若者の力を引き出し、継続した活動を促進するには大変な労力がかかるが、活動の面白さを感じた若者集団の力はすごい。

「近所にお互いの親もいなくて、出産してから3年間、一度も夫婦でデートしたことがない」というお母さんの声を活動の中で聞きとった高校生が、「自分たちが子どもを預かって、夫婦でデートしてもらう時間をつくりたい」「もっと自分たちは親子の役に立ちたい」と言って、みんなで話し合い、私達が想定していた範囲を越えた活動を創り出した事もあった。「どうせやるならディナーを楽しむ時間までOKにしよう」「泣いちゃう子どもも多いやろうし、預かる時間は親と相談して個別に決められるようにしよう」「デート中にも絶対心配になっているはずだから、預けている間の子どもの様子を伝えるシートを作ろう」など、主体的に想像力を働かせながら活動を創っていく若者の姿は、誰の目から見ても頼もしい存在となっていた。これらの活動を通じて若者に会った赤ちゃんの母親からもたくさんの感想が寄せられた。「悲しい事件が起ったり、犯罪の低年齢化が指摘される昨今。こういう夢のあることを考えてくれる中高生達が居る限り、私達大人や地域も見守り、大切に育てていけたら」

私達は、青少年の活動や育ちを支援する者として、ボランティアという言葉の先にある、“地域で輝く若者づくりの仕組み”を大切に育て、そのマネジメントの重要性をきちんと社会に発信していかなければならないと感じている。

執筆：池田英郎

2007, 《コーディネートの現場から～現場は語る》 少年は必要とされてはじめて大人になる, 市民活動総合情報誌『ウォロ (Volo)』 2007.10; 26～, 社会福祉法人大阪ボランティア協会

### 3-3. こどもがつくるまち(京都)

／ミニ京都実行委員会

#### 3-3-1. こどもCityミニ京都

／ミニ京都実行委員会

#### 団体概要

2010 年に“子どもの参画”という考えに共感をもったメンバーが主体となって実行委員会を発足。京都の地、また子どもの活動に取り組む団体や社会に対して、ミニ京都の一連の取り組みを通して“子どもの参画”という考えを広め、子どもが主体性をはぐくむことができる社会となることを目的とした任意団体。

#### ミニ京都実行委員会

(事務局：特定非営利活動法人京都子どもセンター)

〒604-8166 京都市中京区三条通烏丸西入御倉町 85-1

烏丸ビル 2 階 Flag 三条

TEL・FAX/(075)254-8115

<http://www.facebook.com/minikyoto>



#### こどもがつくるまち～ミニ京都～の概要

学校以外で子ども達の居場所づくりや遊び場づくりは多彩な展開がされている。しかし活動内容のほとんどは大人が作り上げたプログラムを子どもたちに一方的に与える提供型である。ミニ京都実行委員会では、提供型ではなく、子ども達の主体性や創造性を生かし、子ども達が本来やってみたい・参加してみたい活動を子どもと大人が同じ立場にたってつくっていき、子どもも大人も参画する事業をつくりあげ、“子どもの参画”という考え方を発信していくことを目的に、「こども City ミニ京都 2011」を、京都造形芸術大学で開催した。

## ミニ京都の特徴

### 主催は様々なNPO団体や個人から成り立つ

団体概要にもあるように、“子どもの参画”という考えに共感をもった団体や個人が主体となって実行委員会形式で実施した。メンバーは、過去に「こどもがつくるまち」に取り組んできた人のほか、普段、京都で子ども・青少年を対象に活動している団体に所属している人や、一般企業で働いている人、行政、個人経営者、主婦、学生などから構成されている。そのため実行委員会の立ち上げ当初は、基本理念となる”子どもの参画”についても、共感をもつものの、それぞれの立場や経験に基づく考え方があり、同じ言葉が異なるニュアンスで使われることもしばしばであった。ひとつの考え方を共有化するだけでも時間がかかり、意見がぶつかり合うこともあった。しかし、“子どもの参画”はプログラムの中心となる考え方なので、このプロセスは丁寧に行う必要があった。また、“子どもの参画”という考え方を発信していこうとしている社会には、そもそも“子どもの参画”という考え方を知らない人の方が多い。そういった人たちに伝える言葉を探すためにも、この共有のための対話は貴重な時間となった。



### 子どもたちと一緒にプログラムをつくる



「こども City ミニ京都 2011」は、実行委員会による事業の枠組みづくりを経て、イベント当日のおよそ半年前に子どもスタッフを募集し、スタートした。

まず、子どもたちと実際に京都のまちを歩き、まちにあるものを撮影したりし、見てきたもの・感じたものを図にし、そこから自分たちがつくるミニ京都のイメージづくりを行った。そしてそのイメージをもとに、模型でつくりたいまちを表現し、

さらにイメージを膨らませていった。その後は会場となる京都造形芸術大学の下見なども重ね、実際に当日に使用する店舗・施設のしつらえなどを作成していった。まちをつくっていく上で基本となるのは、子どもスタッフであるが、そこに学生スタッフも加わり、子どもと大人が共にプログラムを考えていった。時にはかき氷屋さんの看板を一緒に考えたり、ミニ京都の通貨となる「どす」のデザインを考えたりと、対等な関係で準備を進めて



いった。

子どもたちの持つ力を引き出すためには、ただ放っておくのではなく、お互いが意見を言い合えるような関係が重要であると考えている。もちろん時には、大人の思うとおりに行かないこともある。もともとこちらが設定した子どもたちの会議（タウンミーティング）の回数は7回であったが、子どもの希望により2回新たに会議の時間を設け、当日に向けての準備を行った。これも大人が一方的に決めたのではなく、子どもスタッフとの話し合いで決めたことである。



ミニ京都においては、大人は子どもに一方的に何かを与えるのではない。子どもは大人とともに考え、つくっていくのである。それがミニ京都のテーマとなっている、「自分たちでつくる、遊びの場」という言葉にも込められている。

### まちの中で行われること

約半年間の準備を経て、2011年8月に「こども City ミニ京都」開催の運びとなった。4日間の開催期間の中で、15店舗近くのお店が作られ、700人近くの方がまちの住民として参加した。お店には駄菓子屋さん、ホテルなどといったサービスを提供するものから、警察や役場などがあり、それぞれのお店の販売・接客・掃除等といった仕事はすべてそのお店で働く子どもたちが行う。大人の役割としては基本的にはさみやカッター等を使用する際に危険がないかをチェックするなどリスクマネジメントに関わることと、保護者をはじめとする対応など事業の渉外に関することである。



まちで見られるのは、子どもたちがお店で働いたり遊んだりする姿だけではない。市長選挙も行われた。これは、こども City ミニ京都において働いた分の給料から天引きされていた税金を、大人が市長と名乗り、駄菓子を買ったりといった無駄遣いをしていたことが発端となる（この大人市長のストーリー設定については実行委員会でも賛否両論があったのだが）。これに

疑問をもった子どもたちが署名活動を展開し、大人の市長に対してリコールを行った。リコールにより、市長が空位となったことで、子どもたちの中から市長を選ぼうという空気が流れ、役場が主導となり市長選挙が実施された。10名近くの立候補があり、スピーチやロビー活動が繰り広げられた結果、小学6年生の女の子が市長に当選した。

この市長選挙が行われることになった背景には、大人の思いがある。実際の社会には町長や市長などといったリーダーがおり、彼らが中心となって社会が動いていく。現実的にリーダーがいない社会というのはほとんど考えられない。それはミニ京都という仮想のまちでも同じである。リーダーがいることで、まちとしての動きが生まれ、より活発なものになる。そういった思いから、市長選挙はいわば仕組まれたのである。とはいえ、大人が仕掛けた部分はきっかけに過ぎない。「税金を使っている市長がいる」という一言だけで後は子どもたち自身が選挙まで進めていった。まちの中において大人はいかに子どもを「そそのかす」こ

とができるかが重要になってくると考えている。リコールの流れから選挙をし、開票までを大人が考えて作るのは簡単なことだ。そうではなく、大人が作ったきっかけを使って、子どもたちが自らの発想でその先の展開を創りだせるように、環境を整えていきたい。こどものまちに関わる大人に問われる部分はそこだと感じている。



### まちの中での大人

まちの中にいる大人はスタッフだけではない。説明会を受けた人ならばどんな人でも観光客として入場することができた。主に保護者の方に説明をする機会が多かったが、入場にあたって我々が必ずお願いしていたことがある。



- ・子どもと一緒に行動しない
- ・まちのお金をあげない、もらわない
- ・写真をとらない
- ・大人が答えを出さない
- ・あくまで「見守る」

これらをお願いをしたときの保護者の方の言葉で、「頭では理解できたけど、自分の子どもの前では口を出してしまうから、入場したくない」ということが最も印象深い。

その保護者に対して、近くにいたスタッフは「口を出したいけど我慢する人や、口を出している人など様々な大人がいる。そういう大人の姿を見るのも楽しみ方の一つ。」とアドバイスしていた。結局入場していただき、帰る際に声をかけたところ、「確かにいろんな大人がいることが分かったし、子どもも実は自分だけでもしっかりできていることがわかった」と話してくれた。

見守ることができる人だけでないということと、子どもの持つ力を知ってもらえたとい



うことは、この人にとっても我々にとっても成果ではないだろうか。

こども City ミニ京都というプログラムは、前述している通り“子どもの参画”が中心となっている。しかし、これは子どもたちの力だけで成り立つものではない。その周りにいる大人たちがしっかりと子どものことを理解してこそ成立するのである。そういった意味ではこのプログラムは子どもたちのためのものであると同時に、大人たちに対してのプログラムでもある。

### 成果とこれからの展開

こども City ミニ京都の目標として、子どもの参画について1人でも多くの人に知ってもらい、“子どもの参画”をサポートする大人や団体を増やすということがあった。十分とは言えないかもしれないが、一定のつながりを作ることはできたのではないかと考えている。参加者数や体制面など、課題は様々あるがまずは無事にやり遂げたことを成果として挙げたい。

しかし、当初に掲げた目標の達成のためには今後も継続して「こども City ミニ京都」の活動に取り組んでいくことが必要である。今回は京都市全体を対象として実施をしたが、しばらくは行政区や学区など少し狭い範囲で実施していくことも考えられる。地域に根差した取り組みを続けていくことで、より多くの人に知ってもらい、いつかまた大きな範囲で取り組むには、今以上に、子どもたちの主体性や創造性が活かされる社会であることを願って、取り組みを継続していきたい。

執筆：米原裕太郎  
勝村尚代

### 3-3-2. こども City ミニ京都@らくさい



#### 概要

2011年に開催した「こども City ミニ京都 2011」は「こどものまち」の取り組みを京都の多くの人に知ってもらうことを目的としており、これをきっかけとして、京都の中で「こどものまち」の取り組みが広がっていくことを目指した取り組みであった。

その翌年に開催した「こども City ミニ京都@らくさい」は、「こども City ミニ京都 2011」の事務局を担った特定非営利活動法人京都子どもセンターと、洛西を拠点に活動している洛西ニュータウン創生推進委員会（こども部会）が「ミニ京都実行委員会」として運営を行った。

#### 目的

この取り組みの目的としては、以下のことが挙げられる。

- ・ 洛西地域に住む子どもたちが、自分の地域に対して興味を持つ
- ・ 子どもが主体的にいきいきと「遊ぶ」ことができる「こどものまち」の取り組みを京都で広げ、多くの人に知らせる
- ・ 子どもの持っている力を大人たちが知り、「守るべき対象」から「ともに生きるパートナー」であることを感じる

#### 取り組みの経過

対象は、主に洛西地域に住む小学生から高校生とし、まずは「タウンミーティング」という子どもたちによる会議を4回実施した。

まず1回目は、自分たちの住む洛西という地域を実際に歩いて回り、どんなものがあるかを写真で撮ってもらった。それを踏まえて、「自分の住

む地域にほしいもの」「自分の住む地域に必要なもの」を考え、これからつくりはじめる「こども City ミニ京都@らくさい」をどんなまちにするかのイメージを共有した。

2回目は前回イメージしたものを参考にしながら、まちの模型を作った。自分の住んでいる地域にあるもの、ほしいもの、必要なものなどダンボールや紙コップなどを使い、工作していく。子どもだけでなく大人もいっしょになって参加することで、そこにいる人みんなが楽しめるような場を作った。





3 回目は 2 回目につくったまちの模型を参考にしながら、「こども City ミニ京都@らくさい」当日に実際に作るまちの看板や外観を作り始めた。旅館を担当する子どもは客室やフロントなどをダンボールを使って製作していった。

そして最後のタウンミーティングではこれまで作った看板などを組み立て、机やいすを配置してみんなが働くことができるように準備をした。

#### こども City ミニ京都@らくさい当日

全 4 回のタウンミーティングを経て、こども City ミニ京都@らくさいが開催された。2 日間を合わせて 80 名近くの参加があった。まちの中には、ゲーム屋、駄菓子屋、旅館、警察などのお店や施設があり、加えて似顔絵屋、コーヒーショップなどのお店が起業という形で開店した。

今回の「こども City ミニ京都@らくさい」では起業制度のほかに、店舗の買収制度も設けた。これは、一定のお金があればまちの中にあるお店を買い取り、自分がオーナーとして営業できるというものである。これは大人が考えて作った制度であるが、正直、誰もその制度を利用する子どもはいないと思っていた。ところが実際には、3 名の参加者が買収を行った。1 人は駄菓子屋さんを買収したのを皮切りに、計 4 店舗の買収を行うほどの大金持ちになった。

大人が用意したものや仕組みを、用意した側の想像もしない形で子どもたちが使いこなしていくのは、「こどものまち」に取り組む醍醐味の一つであると考えている。

#### 子どもとの関わり

「こども City ミニ京都」において、大人の役割は「見守る」ことだと言える。「見守る」と言っても子どもたちの様子を遠くで見ていることだけを指すのではない。「まち」の中にいろいろな役割があるように、「こども City」に関わる大人も様々な立ち振る舞いが必要となる。

ときにはいっしょになって、どんな「まち」を作るかを考えたり、カッターやはさみを振り回す子どもを注意したり、「まち」のお客さんになったりと様々である。

とはいえ、やはり子どもが何か作業をしていたりするのを見ると、口を出したくなってしまうのは当然だ。むしろ我々としてはそんな大人を見ると「しめた！」と感じる。「こども City」の取り組みは、子どもを「手助けしなければならない」といった大人たちの感覚を変えていける機会でもあるからだ。

「こども City」の主演は言うまでもなく、まちの住民となるこどもたちである。彼らの持つ想像力によって、「こども City」は作られていく。大人はいかに彼らの力を引き出すことができるかが重要となってくる。

### 大人の関わり

結局どういった要素が大人たちを変えるのかと言えば、それは子どもと一緒に「遊ぶ」ことによって感じる「楽しさ」であると考えている。

子どもたちが遊んでいる様子をじっと見ているだけでは、子どもが萎縮してしまったり、大人の目を気にしてしまう子どもも出てくるだろう。

むしろ大人が率先して遊びはじめ、はしゃぎ、共に楽しむことが重要ではないだろうか。



いい意味で「まち」をかき回して、動きを作っていく。そんなちょっとした仕掛けで子どもたちは自分自身で考え、行動していく。「まち」の動きが活発になり、新しいアイディアも出やすくなっていく。

もし、本稿の読者が「こども City ミニ京都」に来場する機会があれば、ぜひ全力で遊んでみてほしい。

### 地域との関わり

こども City ミニ京都@らくさいは 2011 年に実施した「こども City ミニ京都 2011」と異なり、地域の団体や住民の方と連携して実施した。先でも述べたように、単発で大きなイベントをやるのではなく、小さくても継続して実施し、地域に根差していくことを目指したからである。

そのためには NPO 団体だけが活動していくのではなく、その地域に実際に住む方々と共に作りあげていくことが必須である。最終的には地域の方々だけで運営していけるようになることが理想であるが、そのために我々が伝えていかなければいけないことは、具体的なノウハウの部分はもちろん、子どもとの関わり方など様々ある。

地域団体と NPO では組織の成り立ちや関わる人の意識が異なるため、いかにお互いがその差を埋める対話の努力をしていくかが問われる。

### 京都という地域の中で

京都にはやはり「学区」という意識が根強く、小学生や中学生は自分の通う学校の学区

外に出ることは基本的に禁止されている。当然、他の学区の人と関わる機会は多くないと考えられる。これは洛西ニュータウンも例外ではなく、学区を超えて子どもたちを集めるような取り組みはあまり多く実施されていない。

そんな中で洛西ニュータウン創生推進委員会は様々なテーマを持ち、学区に縛られず、幅広く子どもたちを集めて活動をしていた。違う学校の同世代の人と関わることは刺激にもなるし、新しい発見が生まれることがある。NPOには地域や学区に縛られない活動が期待されるのかもしれない。

## 課題

「こども City ミニ京都@らくさい」も含めたこれまでの活動の課題として、参加する子どもの数が少ないことが挙げられる。参加が多くなればより楽しいものになるし、より活発なまちになることが予想される。多くの参加者を集めるためには、もちろん活動そのものの広報活動が重要であるが、やはり「こどものまち」という活動を続けていくことで少しずつ、京都市の中で認知度を上げていくことが必要だと考える。

## 成果とこれから

今回の取り組みの成果としては、まずは少しの人でも「こども City ミニ京都」の取り組みを知り、その良さを感じ取ってもらえたことである。それは子どもがいきいきと遊ぶ姿を見たからかもしれないし、そこに関わる大人たちの姿を見たからかもしれない。少しずつであるが、我々の思いに共感していただき、それに対して「いいね」と言ってもらえたことは成果の一つである。

しかし洛西という地域において、大きな成果が見られるようになるには時間がかかるものであるし、地域の方々の努力がますます必要となってくる。今回の「こども City ミニ京都@らくさい」は、あくまできっかけであり、今後どのようにこの取り組みをひろげていくかは地域に委ねられている。

もちろん、あくまで「こどものまち」は選択肢の一つであり、もしかしたらより良いプログラムが生み出されるかもしれない。我々の目的は「こどものまち」を広めることではなく、子どもも大人もいきいきと過ごせるような社会をつくることである。そういった意味では、既存のものに縛られず、それぞれの地域の特色を生かした活動が生み出されることを期待したい。そこに我々が何らかの形で協力することができるのであれば幸いである。

執筆：米原裕太郎

### 3-4. こどもがつくるまち(全国)

『こどもがまちをつくる』日本におけるこどもがつくるまちの広がりと特色ある事例

ミニ・ミュンヘンをモデルにした「こどものまち」が、日本では約 80 ヶ所の地域で開催されるようになっている。1988 年 I P A (子どもの遊ぶ権利のための国際協会) 欧州大会がミュンヘンであり、木下<sup>5</sup>らが日本に紹介した。1997 年に、高知県香北町(当時)にて日本ではじめての「こどものまち」が実験的に開催された。2002 年に千葉県佐倉市でミニさくら、そして仙台でこどものまちが開催されて継続性をもって開催されるようになってきた。2005 年に卯月<sup>6</sup>らによるミニ・ミュンヘン研究会<sup>7</sup>が DVD (萌文社) を作成したことが、全国に広がりを作った 1 つの要因といえる。こどもがつくるまちは、ミニいちかわやミニ大阪など複数の開催地で実施をしているところもあり、藤沢市における小学校の総合学習の時間での開催や、とよなか国際交流センター(大阪府豊中市)での大きなイベントの一企画として開催されるなど多様な広がり方を見せている。



ミニよこはま(以下、「ミニヨコ」と略)では、2007 年より行われているミニヨコの歴史と共に他地域のこどものまちとの交流や全国のリンク集も紹介されている電子本<sup>8</sup>が作成された。100 p にわたるこの電子本は、常に更新されている。ミニヨコの特徴はまちづくりのデザイン性にあり環境に配慮した街を意識しつつこどものむらを作ってみたり、子どもと大人が一緒になってまちの未来を構築している点にあるといえる。

2012 年、ミニいちかわ 10 周年の開催と共に「第 6 回こどもがつくるまち主催者全国サミット 1 2」も同時開催された。ミニいちかわの特徴は大人をスタッフとして広く迎え入れている点にあるといえる。こどもの参画は、大人の子どもの人権を守ると意識の成長がなくては成り立たないため、主催者は見学に来る大人に「スタッフをしませんか」と積極的に声をかけるという。スタッフとしての関わりを通して、子どもへの視点を考え直す機会としているといえる。またミニいちかわの資金は、市川市の施策である「1%支援制度」によって賄われている。こどもがつくるまち研究会<sup>9</sup>を中心に、『こどもがまちをつくる』

<sup>5</sup> 木下勇(千葉大学大学院教授)専門 工学博士都市計画学 農村計画学

<sup>6</sup> 卯月盛夫(早稲田大学社会科学部・社会科学総合学術院教授)専門 建築デザイン

<sup>7</sup> ミニミュンヘン研究会 [http://www.mi-mue.com/about/about\\_us.html](http://www.mi-mue.com/about/about_us.html)

<sup>8</sup> ミニよこはま(ミニシティ・プラス)電子台帳

[http://minicity-plus.jp/common/ebooks/MINIYOKO\\_MIRAI\\_KISEKI\\_a.pdf](http://minicity-plus.jp/common/ebooks/MINIYOKO_MIRAI_KISEKI_a.pdf)

<sup>9</sup> こどもがつくるまち研究会 <http://asobinomachi.jp/>



(萌文社)では、みえけんぞう、山本香奈子が、5つの視点を中心に、全国のこどものまちを分類しているので紹介をする。視点6は、筆者が考えた分類として表示している。

次ページに、各地の「こどものまち」をそれぞれの視点によって分類した表を掲載する。

注) 表は「こどもがまちをつくる (2010)」より抜粋し加筆した。

視点1は、出発点(立ち上げの際のこだわり)の違い。

| あそび・創造性                                           | あそび・創造性                   | 自治の体験<br>まちづくり                | コミュニケーション                      | 教育・仕事体験                              |
|---------------------------------------------------|---------------------------|-------------------------------|--------------------------------|--------------------------------------|
| こども四日市<br>ミニ☆大阪<br>仙台こどものまち<br>ミニたちかわ<br>チャキッズタウン | ミニさくら<br>ミニいちかわ<br>ピンボン横丁 | ミニさっぽろ<br>ミニヨコハマシティ<br>ミニしずおか | むさしのミニタウン<br>なごみん横丁<br>ピノキオタウン | ミニ大阪<br>だがねランド<br>ミニたまゆり<br>広島キッズシティ |

視点2は、「準備段階におけるこどもの関わり方の違い」の分類。

|                                     |                                       |                                          |                                       |
|-------------------------------------|---------------------------------------|------------------------------------------|---------------------------------------|
| 準備段階からこどもに決定権がある                    | 日頃の別の活動が「こどものまち」の中身やしぐみに反映される         | 大枠は大人が決定しつつも、子どもの意見が準備段階から反映される          | 準備は大人ががっちりおこなうが、開催期間内における変更などは子どもに任せる |
| ピンボン横丁<br>ミニ☆大阪<br>ミニ☆シティキッズハッピーよこ町 | こども四日市<br>たちかわ<br>むさしのミニタウン<br>ミニしずおか | ミニさくら<br>ミニいちかわ<br>ミニヨコハマシティ<br>広島キッズシティ | ミニミヨハシ<br>仙台こどものまち<br>とさっこタウン         |

視点3は、「専門家による協力の違い」の分類。

| あそびの専門家                                                                                                          | 仕事の専門家                                                    | 空間作りの専門家                                                                                            | 関係づくりの専門家                                                                                          |
|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 仙台こどものまち<br>安藤正樹さん<br>(全日本独楽回しの会会長)<br>こども四日市<br>重森ペンギンさん<br>(あそび術の専門スタッフ)<br>ミニさくら<br>椿八郎さん<br>(リサイクル工房あそびの仕掛人) | 全国的に協力者多数<br>そば・うどん職人<br>大工<br>和菓子職人<br>ラジオDJ<br>青年会議所 など | 仙台こどものまち<br>ヨネクラマサチカさん<br>(建築学校の先生)<br>とさっこタウン<br>中越令子さん<br>(デザイナー)<br>ミニ☆シティ<br>蛇谷りえさん<br>(アーティスト) | ミニ☆大阪<br>二葉智代さん<br>(元児童館職員)<br>ミニさっぽろ<br>長谷部英司さん<br>(札幌市市民局職員)<br>なごみん横丁<br>三矢勝司さん<br>(まちづくりNPO職員) |

視点4は、「よりよい運営のための連携づくり」で分類。

| 児童館との関わり                       | 公民館との関わり            | 商店街との関わり                           | 行政との連携                                    | 企業からの協力                                     |
|--------------------------------|---------------------|------------------------------------|-------------------------------------------|---------------------------------------------|
| キッズハッピー横丁<br>こども四日市<br>ミニたからづか | ミニむさしのタウン<br>なごみん横丁 | こども四日市<br>ミニさくら<br>未来ぼーろ<br>ミニしずおか | ミニさっぽろ<br>ミニヨコハマシティ<br>だがねランド<br>仙台こどものまち | ミニヨコハマシティ<br>ミニさっぽろ<br>こどものまち高砂<br>広島キッズシティ |

視点5は、「保護者との関係づくり」で分類。

|                                      |                                                  |                                           |
|--------------------------------------|--------------------------------------------------|-------------------------------------------|
| 大人の学校をつくって、「こどものまち」の考え方を理解してもらう。     | 「大人スタッフ」として、保護者に「こどものまち」に参加してもらう                 | 「大人スタッフ」として、保護者に「こどものまち」に参加してもらう          |
| ミニさくら<br>ミニいちかわ<br>ミニ☆大阪<br>チャキッズタウン | ミニいちかわ<br>むさしのミニタウン<br>ピンポン横丁、ミニしずおか<br>広島キッズシティ | (×印マスク) ミニヨコハマ<br>(ガイドツアー) とさっこタウン、ミニたちかわ |

視点6 政策への反映。

こどものまちとこども条例の関係を見てみると、連動している地域がある。

「こどものまち」の市長が現実の市長と交流する機会をつくるなど、「こどものまち」の運営主体が、市民による市政参画の推進に積極的な行政の首長を呼びこむことで、トップダウン的に施策への反映につながるが多い。なごシティ（名古屋市）・とさっ子タウン（高知市）における取り組みでは、こども青少年局として行政の側がかかわることで、こども条例との政策的な一環性を持つようになってきている。



こどものまちにおける子どもへの視点は、こどもの参画やこどもの意見が尊重されるように、現実のまちづくりに反映させることで、子どもの生活文化環境そのものの変化を促すことで真価を発揮するといえる。

#### こどものまちの参考資料

- ・子どもの遊ぶ権利のための国際協会日本支部公式サイト <http://www.ipa-japan.org/topframe.html>
- ・『子どもの参画』—コミュニティづくりと身近な環境ケアへの参画のための理論と実際  
ロジャー ハート, 萌文社, 2000
- ・『ヒア・バイ・ライト（子どもの意見を聴く）の理念と手法』  
特定非営利活動法人子ども&まちネット, 萌文社.

執筆：村井繁光

## 第4章 「子ども」でつながる地域

### 4-1. 子どもを軸に地域で連携～ふれあいフェスタ～

／NPO法人京都八幡こどものひろば

ふれあいフェスタのスローガンは「つなげて ひろがれ そだちの輪」

このスローガンは子どもを軸に地域で連携しながら共有しあおうという気持ちそのものを表しています。

#### 団体の概要

京都八幡こどものひろばは地域での舞台鑑賞や子どもたち自身による体験活動を 20 年間にわたり支援してきた八幡おやこ劇場を母体に、子どもの文化・芸術・社会環境の向上を目指し、子どもたちの自主性・創造性を育み、豊かで健やかな成長に寄与することを目的に、2003 年より NPO 法人として地域に根ざした活動を始めました。子どもの権利条約を基本理念として活動をしています。活動内容は任意団体の頃に中心とした鑑賞活動から大きく幅を広げ、子どもの体験活動、子育て中の親子を対象に子育て支援、子どもの権利に関する啓発と学習会等を年間を通して常時行っています。地域の中で子ども・子育てに特化して年間を通した体験活動を実施する NPO として、地域イベントに積極的に参画し、NPO 他団体との連携にも注力しています。



特定非営利活動法人 京都八幡こどものひろば

〒614-8063 京都府八幡市八幡岸本 70

TEL&FAX. 075-982-3408 <http://blog.kodomo-hiroba.net/>

#### ふれあいフェスタ実施の背景と目的

子どもが主体となる活動を行ってきたものの、少子化による子どもの減少に加えて、子育ての孤立化や親世代の体験不足、情報の多様化による子育て観の混乱などの問題が顕在化し、一方で子育て無縁世代とのギャップを強く感じるようになってきました。子どもが「いない」のではなく、子どもは減って来ても「いる」、しかも「地域」の中で育っている。そのことを実感し、子どもを主体とするためには地域の中で子ども観を共有し、地域ぐる

みで子育てを見守る環境が必須だと考えるようになりました。



もともと 2005 年より同じ「ふれあいフェスタ」の名称で鑑賞をメインとした地域イベントを行っていましたが、2008 年ふれあいフェスタで市内 NPO のネットワークづくりを目的に他団体にも呼びかけ行なった活動パネル展示をきっかけに団体間の意見交換の中から、子ども・子育てを軸にした体験イベントをしようというムードが出てきました。



このような背景があり、2009 年度から同世代の親子や違う世代の地域の大人が、様々な体験を通して、出会い・触れ合い・つながる交流の場を作り、子ども・親・支援する地域の大人、それぞれが相互に育ち合い、地域全体で子育てを共有する大きな輪となることを目的として、子どもを軸にしたふれあいイベント「ふれあいフェスタ」を計画しました。2010 年度からは会場を地域内小学校体育館に移し毎年 6 月に行っています。

### 実施に当たって

●八幡市内の NPO 他ボランティア団体や子どもに関わる団体、作業所関係等が参加しています。

これまでの参加協力団体は 12 団体。市外関連団体からの協力も得ています。

●中心になる団体と実行委員会を持ち、準備から反省までの会議で意思の疎通を図っています。

●会場は子どものイベントという点から、地域の子どもや親が足を運びやすい小学校体育館。

会場選定では当初、生涯学習センターで実施したものの、異なるフロアでは全容がつかめない、子どもになじみが薄い等の反省点から、小学校に変更して現在に至っています。

●内容はカプラ、木工体験、おもちゃづくり体験、体操、お話し体験、ベビーマッサージ、和太鼓、ダンボール積み木、大型紙ずもう等、子どもと乳幼児親子の体験に絞っています。

●広報は、地域内の幼稚園・小学校を通じてチラシを全戸配布しています。



### 成果

特に東日本大震災を経験した 2011 年以降は、親子の、地域のつながり、「絆」を実感するイベントとなり、地域で共に子どもの育ちを見守り、子育てを応援するつながりの輪が徐々に大きく強くなってきつつあります。

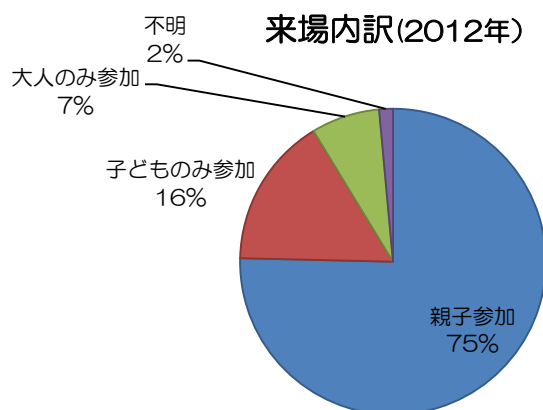


「子ども・子育て」の軸がはっきりしているために、参加団体のボランティア全員に目的意識が共有化され、主人公が「子ども」だということが会場全体に浸透しています。これは、八幡市内の他のイベントに見られない大きな特徴です。この共通意識が、地域全体で子どもの育ちを見守る土壌づくりの底力になっていると感じています。



全体の動員数は年次増加しています。概数で2009年200名、2010年約250名、2011年約300名、さくら小学校での開催が3年目となった2012年は前年より全体で約2割程度多い約350名でした。中でも特に幼稚園児・小学生の参加が増えたと感じました。(子どもの参加は約3割増)。毎年開催することで、子どもや保護者の間にも認知され、ふれあいの場となっています。また、チラシが学校から配られることで直接子どもの手元に届くことも来場動機につながっています。

来場者の内訳をグラフで見ると、子ども・子育てのイベントとして認知されていることがはっきり見えてきます。(グラフ参照)



子どものみの参加がみられるのは、地域内の子どもを対象としたイベントであり、お金を持ってこなくても楽しめる体験を中心としているので、子どもだけで安心して参加できる、親も安心して送り出せることが読み取れます。

ふれあいフェスタの継続実施を通して、地域に住む大人と子どもとの間に顔の見えるつながりが生まれてきたように感じます。子どもが社会に参画するということは育っていく過程で人間として存在が認められていることが大前提にあります。その意味ではふれあいフェスタは子どもを地域の子どものように育てようという共通意志を確認する場になっているといえます。





#### 4-2. 地域が子どもの育ちに関わる～「町たんけん」から見えること～

／NPO法人山科醍醐こどものひろば

##### 主催：NPO 法人山科醍醐こどものひろば

1999 年 NPO 法人設立。地域に住む全てのこどもたちが豊かに育つ社会環境や文化環境を充実させ、こどもたちの伸びやかな育ちに寄与できる団体を目指し活動する。前身「山科醍醐親と子の劇場」から 33 年目を迎える。「子どもを真ん中に」をキーワードに、異年齢集団の中でのこどもたちの体験活動作り、こどもと家族が自由に集える居場所づくりや文庫活動、子育て相談、生の舞台を楽しむ活動などを実施。

また、ただ子どもと直接関わる活動だけではなく、より地域と子どもが結びつく、また子どもを通じて地域に何ができるのか考え、地域社会の活性にも取り組んでいる。現在は子どもの貧困対策を大きな柱として掲げている。



〒607-8088 京都市山科区竹鼻地藏寺南町 2 番地の 1

TEL & FAX : 075-591-0877 mail : kodohiro@gmail.com

<http://www.kodohiro.com/>

##### 町たんけんチーム

2002 年 7 月に、地域を好きになる子ども達を増やそうと、地域を大事に考える大人が山科醍醐地域をフィールドに、上記団体内に立ち上げた組織。1 年目は日本財団の補助金を得、小学生から中学生まで 41 名で活動をし、最終報告書を作成した。この 1 年目の活動が組織内や地域全体でも評価されたこともあり、継続的な事業として続いて行なった。



2012 年度のメンバー・スタッフ

チーム設立の趣旨は、生の文化体験・社会体験から、実際の生活に役立つ「生きる力」になる原動力を生み出すこと。多くの人と交わることで、一人一人の子ども自身が内面から豊かになること。地域社会をより良く変えようとする気持ちの動機付け。このような活動から、今を生きる子どもが力を生み出し、地域に住む多様な子どもたちがのびやかで豊かに日々を過ごせるため、地域に根付く活動として「町たんけん」事業を位置づけ、実施している。現在は大きく 3 つの柱で進めている。

2012 年度スタッフは 11 名、代表・朱まり子。

- ① メンバー制（小学生・1 年単位）で山科醍醐の地をたいけん・はっけん・たんけんする。
- ② 上記の活動を柱にして、ガイドブック（報告書）を出版・配布する。



### ③ 「山科かるた」普及活動（かるた大会・販売・広報）

#### はじめに

子ども達が地域で暮らす際、その土地に興味を持ち、楽しんで過ごすことはとても重要なことの一つである。私たちは「町たんけん」プログラム（地域を探検し・体験し・発見する）で、自分の住む地域を知ることにより、興味が湧き、関心を呼びおこし、「この町が大好き！」と言えるような地域への愛着へと発展していくと考えた。地域を好きになるのは、その地にどれだけ深く関わるかによるが、実際に活動にお誘いできる子どもの人数は限られている。そこで、私たちは「山科かるた」や「ガイドブック」を通し、子ども達に地域の姿を伝え、大好き仲間を増やすことを目指している。このように、地域と子どもが密着した活動を進めている例として、2002年から始めた『町たんけん』を報告する。

#### 地域を知る活動 町たんけんの持つ意味



新山科浄水場にて

11年にわたる（第1期＝2002年7月～1年間、以降ほぼ毎年1年単位の活動）活動で目指している道筋は、知ること、自分のグラウンドへの興味が湧き、その興味が地域への親しみを呼び起こし、地域への愛着へと発展していき、その最終段階では、自分が知り得たことを同年齢の子どもたちへ伝達するため、地域のガイドブックを作成することである。子ども達は、経験した地域との出会いを、冊子を使い伝達するという作業を通し、地域に住むということ・町そのものの持つ意

味を再確認することになる。

活動の中で大事なことは仲間づくりだ。異年齢での子ども集団を形成する中で、豊かな発想や思いがけない出会いや仲間を認め合う気持ちが育つ。子どもの視点・考え方を尊重していく中で、より良い子ども集団になる。異年齢集団は子どもだけではない。スタッフである学生・社会人・母親のような年齢の人や祖父母のような年齢の人たち、講師としてその場で話をして頂ける方をお願いしていることもあり、あらゆる年代の人と交わり、共通の話題で括ることで、子どもにとっても大人にとっても、人との出会いの場となっている。「町たんけん」の活動は小さなコミュニティーであり、地域を好きになるための助走の役割を果たしているとも言えよう。

ある日、東海道新幹線に架かる陸橋で、新幹線に目を奪われていた子どもが、急に、「なあ。ぐるんとまわる



東海道の車石についての話を聞く

と、まわり全部山やで。お皿みたいなところにいるんやなあ。」と言った。

山科盆地の、彼なりの発見である。わたしたちの目指しているのは、実感に基づく、このような小さな発見。自分自身で獲得する、このような小さな成果の積み重ねこそを大切にしている。

「町たんけん」の活動は学校の勉強みたいだねと言われる事もあるが、根本的に違うのは、本人が楽しみにして、自らの休日に自らの意志でもって、したいから参加していることである。そこでは、面倒そうなことでも、話し方や持って行き方次第で、子ども達が目を輝かせる。そういう感情が湧かなければ、地域に対する愛着などは湧くはずもない。

### 子どもと大人の関わり

期間を決めての参加者との活動とは別に、地域へ出向いて「山科かるた」を楽しんだり、「ウォークラリー」で一緒に歩いたりする一期一会の活動もある。その全てに共通するのは、子ども達が町に出て、多くの物に出会うだけではなく、地域の大人達と深く関わることである。工場・商店・寺院・施設、どこに於いても、そこに居られる大人から直接話を聞き、学び、質問をする。子どもと大人が言葉のキャッチボールを交わすこと、それを積み重ねることで、地域社会を動かしている大人という存在に、子ども自身が気付くことになる。あるいは、その活動に詳しい方（野鳥観察や山などの自然観察、歴史地理の専門家など）を講師としてお迎えすることで、子どもたちの興味に正確に、また意味のある受け答えをして頂く中で、「大人ってすごいな!」という気持ちや、「こんな人になりたいな」というようなロールモデルとなるかもしれない。



野鳥観察では、毎年 20~30 種類の鳥を見る

### 大人同士のつながりも意識して



この本に書かせて頂いたことが、新たなつながりを生んだ

事業を始めるにあたり、大学と区民が行った地図作りを見て、京都橘大学の先生の研究室を訪問した。そこで、活動の考え方、配慮する点などをご教示頂いた。その後、大学が地域で開催している研究会に参加することになり、地域の色々な人と出会い、区役所ともつながり、企業などの見学も受け入れて頂けるようになった。地域の神社の宮司が声をかけて下さったことで、今まで出会いの無かった人とも多くつながった。今では、地域の人がこの活動をとっても大事にして下さる。

また、昨年発行した「山科かるた」では、販売協力店（マージン無で販売）が多くできたし、地域商業ビジョン

の取り組みとして、「山科かるたウォークラリー」が開催され、かるたの読み札・絵札を探し、多くの人々が町中を歩かれた。このように活動が人々に受け入れられている事に感謝したい。大人たちが繋がり、子どもが育つ地域を責任を持って耕し、心を育める地域にしたい。

### 子どもたちに、ナマの事柄として伝えたい

毎年、継続したメンバーでの活動の最終段階では、自分が知り得た地域の良さを、同年齢の多くの子どもたちへ伝達するため、地域発見の「ガイドブック」（年によっては報告書）を作成する。そこで子ども達は、自分の経験した「地域との出会い」を伝達するという作業を行う。次に、出来上がった冊子を配布する際、話すという作業を通し、子どもたちは地域を再確認することになる。その伝道者の部分も子どもたちにとって重要であると考えている。よって、出来るだけ本人の写った写真、本人の書いた絵や文章を多用し、どこに於いても＜自分の事＞として語れる冊子を作成するように心掛けている。



安祥寺で十一面観音像を描く

もう一つ意識しているのは、実感を伴うような伝え方である。例えば、女の子が草か実を実際に口にしている写真を見て、撮影場所（この場合は日本新薬山科植物資料館）での出来事を想像してみる、あるいは共に掲載されているスケッチが、「どんな味なのかな、もっと知りたいなあ」とか、「行ってみたい」とかの気持ちを呼び起させることを期待し、編集している。私たちの目指すのは、観光案内書でも、行先の内容が十二分に把握できるものでもない。子どもたちが実際に何に興味を示し、どんなふうに行動したのか、そういうナマの事柄を伝えたいと思い、編集作業に携わっている。



2013 年度報告書の一部

### 愛着を持てる地域を目指して

これからを担うのは、子どもだと言う。地域の良さを残し、伝えていくために、子どもたちにどのように対応するのが良いのだろうか。一概に伝えるといっても、それにはその前段階が必要である。長くこの活動をしていて感じるのは、一方的なことではなく、子どもの方から伝えて欲しいと願ったり、知りたいと思ったりする子どもを育てることに尽きると考えている。

知りたい・学びたい・伝えて欲しい…の段階に到達するには、それ相当の努力がいる。その地に育ったら、皆がその地を愛するとは限らない。大勢の子どもに対し、伝え続けて行くためには、しぶとく、インパクトのある事柄を使いながら、心を込めて、前に向かっていく大人の姿勢こそが必要だと考えている。



山科区の保育所・幼稚園・小学校には無料配布したので、よく遊ばれている。知ることは、好きになる第一歩。現在、一番人気なのは、お年よりの施設での遊びの場である

(参考) 地域に興味を持つために実施したこと

#### 産業・伝統産業を知る

清水焼（手ひねり体験と窯元・展示場の見学）  
 仏具工房（修理見学・金箔押しの盃を制作）  
 農業（夏野菜の畑見学・稲の生育状況の観察・稲刈り・秋野菜の畑見学・観光農園で収穫）  
 京菓子（和菓子制作）  
 工場見学〈とのこ・金属箔粉〉、等

#### 地域を知る

京の田舎民具資料館見学  
 わらの大蛇見学  
 植物資料館見学、  
 琵琶湖疎水（小関越・歩く・トンネル・日本最古のコンクリート橋など・琵琶湖の取水口を見る）  
 交通の今昔を知る（旧東海道の地蔵探し・東海道本線・京阪電車が地下から地上に出るスポット・京阪電車線路跡が公園に変貌した場所の見学・新幹線を見下ろすスポット・旧山科駅・名神高速の起工地・旧東海道線の伏見駅見学）等

#### 歴史を学ぶ・史跡を見学

安祥寺・勧修寺・随心院・毘沙門堂・四の宮地蔵（六地藏の一つ）・  
 山科本願寺跡（地図を見ながら見学・当時の歴史や背景などを学ぶ）  
 醍醐寺（三宝院庭園・山門の仁王像・五重塔のスケッチ・上醍醐へ）  
 牛尾山法蔵寺、山科側から伏見稲荷大社へ参拝 等

#### 公共施設などの見学

花山天文台、新山科浄水場、エコランド音羽の杜、山科区役所の発掘土器見学

#### 自然観察

牛尾山（ミドリセンチコガネの観察、昆虫、野鳥観察）  
 山科川と旧安祥寺川の水の温度の違いなどの観察、山科川の野鳥の観察 等

執筆：朱 まり子



#### 4-3. 表現する喜びで、こどもたちの自己肯定感を高める

／新大宮こどもの基地実行委員会



##### コンセプト

表現の授業を行う！

こどもたちが自分自身を“表現”し、“発表”し、“感想”を伝え合うことで、こどもたちの自己肯定感を高めていく。

##### 授業の3か条

- ・ こどもが主役であるべし
- ・ 表現をありのままに受け止めるべし
- ・ 自分の授業の自信をもつべし

代表：伊藤 彩絵 坂口 聡, 酒井 直樹

[TEL:075-200-9295](tel:075-200-9295) kodomo.kichi2013@gmail.com

共催：新大宮みんなの基地

京都市北区紫野上門前町 2 1

#### 事業概要（「こどもの基地」とは）

小学生を対象に、写真を撮ることや絵本を作ることを通して、子どもたちが持つ思い、完成をカタチにする授業を展開する。

新大宮商店街を大きな学びの場とし、違った学年の友達・大学生・身近な大人との交流の中で楽しく遊びながら行う授業。子どもたちが自己表現の楽しさを知り、自己肯定感を高められるような場を目指している。

平成 25 年 3 月 2 日に、立命館大学准教授の荒木氏を迎え「表現する喜びを、こどもたちへ」というテーマで講演会を開催し、オープニング授業を行った。

その後、3 月中の土日に様々なテーマで「表現の授業」と呼ばれる小学生向けのワークショップを 7 回開催。毎回、講師と大学生スタッフを交え、子どもたちと共に表現を楽しんだ。

会場は主に新大宮みんなの基地、および新大宮商店街を舞台に行われた。

#### 実施のきっかけと流れ

発足のきっかけは、地域（新大宮商店街）のコ



コミュニティスペースに集うメンバーが、  
「商店街」×「こども」×「若者」  
というキーワードでの企画を思い立ったことから。



毎回、教員志望など、子どもに興味のある大学生のボランティアスタッフが数人と講師で打ち合わせを行い、その回の授業に対する思いをお互いに共有した。講師と担当の大学生スタッフが共に考えたプログラムに沿って授業を進めた。

毎回、子どもたちがそれぞれの作品を制作し、それらの作品は3月30日-31日に「こどもの基地展」を開催して公開展示し、子どもたちが中心

となり見学者への作品説明を行った。

音楽、ダンスなど製作物の無いものについても授業の様子を録画した映像などが流された。

授業やその準備、告知などは地域の教育機関及び児童館へのチラシ配布を行い、またホームページ、Facebookページにて随時情報をアップした。ホームページには、授業の申し込みフォーム、問い合わせフォームと共に各授業の様子や、その授業の担当の大学生スタッフが書いた授業レポートがアップされている。

### 子ども・おとな・スタッフの感想

子どもたちの中には、前回参加した授業がとても楽しかったので次回も参加したい、といった意見があった。保護者からも、子どもが楽しそうにしているのを見るのは親にとっても幸せである、といった意見があった。会場の外から商店街の人が中の様子を見ていいねと言われる場面もあった。講師も、子どもたちが想像していたよりもはるかに高い表現力があることに驚き、「もっとこんな機会が増えればいいのに」という声があった。大学生スタッフからは、「どう子どもとコミュニケーションをとるかなどと言った点で、非常に勉強になった」という意見が聞かれた。

### 課題

内容も充実しいていて参加者や周囲、スタッフの反応が良かったものの、参加した子どもの数は少なかった。

広報は、HP、Facebook、フライヤー(チラシ)であったが、どれも保護者向けにしていたことが広報の失敗の原因だったと考えられる。小学校校門前などでビラ配りなども行ったが効果は見られなかった。加えて、年齢制限をしてしまったことも、参加者が少なかった原因の一つと考えられる。

ただ、フライヤーを置かせてもらいに行った児童館や小学校などの教育関係者からはよ



い反応があった。

### 地域の中の子どもたち

地域のなかにあるコミュニティスペースで異なる学校の友人とふれあう機会や、のびのびとした表現ができる機会を子どもたちに提供できる。地域の中で子どもたちが集まり、表現を楽しむことで周囲にも良い影響を与えることを、今回強く感じた。



これから

今後は、代表のネットワークによる講師だけでなく、大学生が子どもたちと共に学びたいと思う分野の講師を探して参加してもらうなど、今回をふまえてさらに充実した授業を展開できないかと考えている。

年齢制限を見直し、子ども向けの広報を考えることで、参加者が増えることも期待している。

### 取材所感

今回は、プロジェクトのスタッフの一員として関わりながらの取材だった。

実際に表現を子どもたちと共に楽しんでいくなかで、この取り組みには大きな可能性があるという風に感じた。

場所や資金面に関して余裕があれば、表現の自由度をさらに高めることができると言える。今回の取り組みに刺激され、何か自分でもやってみたいと感じた大学生スタッフもいた。地域のなかで、子どもたちの笑い声が響く場所が存在するというのは、その地域にとって非常に大きな財産だと考える。

インタビュー お話：伊藤彩絵さん  
聞き手：安井悠一郎  
まとめ：安井悠一郎

#### 4-4. 地域に豊かな福祉を築く

／NPO法人フォーラムひこばえ

#### 団体の目的と方針

住民主体の地域福祉を応援する法人として、児童館事業とひこばえ独自事業がうまく連携し合って、コミュニティセンターとして活動することを目指している。

- 地域の人たちが主体的に活躍できる場や方法を提供し、協働のまちづくりを進める。
- 地域の福祉課題に応える。また制度にないこともどうしたらできるかを考えていく。

以上2点をモットーに活動している。

〒616-8208 京都市右京区宇多野福王子町 45 番地  
2

TEL : 075-463-0438 FAX:075-468-3077

E-mail:office@hikobae.org

HP:http://hikobae.org

#### 事業概要

うたの・ひこばえ児童館事業、地域子育てステーション

- 学童保育・・・小学校1～3年生(障がいを持つ子は4年生)
- 児童館・・・乳幼児、小学生、中高生、母親サークル
- 地域子育てステーション・・・子育て講演会・相談等

ひこばえ事業(コミュニティセンター)

- 子どもと保護者の楽しく豊かなくらしを支える事業・・・少年団、放課後デイサービス等
- 地域の人たちの交流を深める事業・・・各種サークル活動、くらし講座等
- 地域福祉を推進する活動・・・ひこばえ祭り、右京区地域福祉推進委員会への参加等

2003年に宇多野に豊かな福祉を築く懇話会という有志の会が発足し、「フォーラムひこばえ」設立のきっかけとなる。2005年にNPO法人格を取得し、建物の改修を経て2009年に児童館事業を受託する。2009年に地域子育て支援ステーションを受託し現在に至る。

「フォーラムひこばえ」は現在、受託事業として児童館事業、地域子育て支援ステーション事業、ひこばえ独自事業として中高年向けの講座や、障害を持つ中高生のために放課後デイサービスなどを行っている。

児童館向けの職員5人、館長1名、職員4名。本部事業をするために正職員1人。合わ

せて6名。

児童館で絵を教える場合に地域の絵画教室とのマッチング、障害者支援の方と障害者をマッチングしたりするなど、コーディネート業務も行っている。

子どもたちに関しては、かつて学童保育で過ごした子どもたちが大学生になった今、ボランティアで小さな子の面倒を見ていたりする。施設内に運動場があり、ひろびろと遊べる。



### 団体名の由来

フォーラム：古代ギリシャではみんなが集まって議論する広場

ひこばえ：切り株から生まれる新芽のこと

「フォーラムひこばえ」という名前は、その名の通り、古い切り株にみんなが集まって話し合う中で、新しい芽がでることを願ってつけられた。

設立当初は、児童館事業を受託していなかったため、地域のつながりをつくるコミュニティスペースという説明は地元住民には理解されなかった。回を重ねて説明会を実施することに加え、児童館事業の開始によってようやく住民にも理解が広がっていった。

### ひこばえの子どもたちの育ちとおとなの役割



子どもたちが育っていく中で、職員が気をつけていることがある。

大人がどう声をかけるか、大人のフォローが大事であると考え、子どもたちの中に生まれた課題には集団でアプローチすること、それぞれ個人による違いを受け入れる空気をつくることを大切にしている。

現在ひこばえに来ている中学2年生は障がいを持つ子をグループに含めて、それぞれがスムーズに活動できる

よう自ら工夫している。学校などでは、多様な子どもが交流しながら活動する機会は少ないため、このような場は非常に貴重である。

また、ある子が、小学生のころに編み物をおしえてくれたおばあちゃんに、ひこばえを卒業した中学3年生になって修学旅行のお土産を買ってきたというエピソードがある。

児童館事業と団体の自主事業の連携によって小学校1年から中学生の子どもたちが同じ場所にいる、加えて中高年向けの講座に集まった地域の人とも同じ場所で時間を過ごす。そのような活動が地域に日常的にあったことで生まれたエピソードといえる。

ひこばえの、コミュニティセンターとしての状況は、集団生活や地域のつながりを築いていく文字通り拠点どころである。このような場所は地域の中に、さまざまな世代とのつ

ながりを生むための媒体として大きな存在になっていくと言える。

## 課題

一方、この状態を維持、継続するには多くの問題が山積している。

資金面では、児童館事業と自主事業を両立するためには、児童館事業等行政からの委託費だけでは充分ではない。現状の職員数では両事業を運営するためには少ないが、人件費との兼ね合いで職員を増やすことができない。

学童保育事業に関して、登録する子どもが急増していることも問題である。迎えに来る保護者の車をどこに停めるのかなど地域との関係を円滑に保つための細かな配慮も必要である。

児童館への来館者数という数字だけでは、ひこばえの仕事を見ることができない。

## これから

今後は、ひこばえ独自の事業をさらに充実したいという。それらを達成するには、資金面やスタッフ数など難しい課題があるが、行政の支援やNPO 同士の協力などがあれば、目標に近づくのではないかと考える。

## 取材所感

取材してみて感じたことは、フォーラムひこばえは地域との関わりをととても長いスパンで考えて活動しているという点だった。

子どもと保護者を一緒に育てる。そうすることによって、保護者同士のつながりを生み、そのつながりが、また次の世代に受け継がれてゆくことまで考えているという。

地域以外に向けての発信には積極的でないこともあり、外部団体などとのつながりは生まれにくい。しかし、コミュニティスペースを継続的に運営することを考えた場合、地域に根差す団体とは言え、その地域以外のとのつながりも持って協力していけば新しい動きになるのではと感じた。



インタビュー お話：井上公子さん  
聞き手：中道秀貴  
安井悠一郎  
山田光瑠  
まとめ：安井悠一郎

#### 4-5. 地域拠点としての学校（開かれた学校）

／一般社団法人洛峰ココイマプロジェクト

##### 洛峰ココイマプロジェクトとは

洛峰ココイマプロジェクトとは「京の里山 ココで暮らすイマを暮らすプロジェクト」の通称。いわゆる「政令都市における山間過疎地」である京都市左京区北部の別所・花脊・広河原・の5地区で、「子どもの元気」をキーワードに、「ココ」の暮らしや地域の「イマ」を発信して地域の仲間を増やそう！子育て環境を見直そう！という地域活性プロジェクトです。<http://kokoima.jp/>

きっかけは、別所・花脊・広河原の3地区、6つの小中学校の統合を地域住民自らが決断したことからです。

花背小中学校を拠点とした地区間の地域目標（ビジョン）を実現することを目的に、平成22年には、地域が活動の運営主体となる一般社団法人洛峰ココイマプロジェクトとして法人化されました。

現在は、左京区まちづくり活動支援事業の交付金を受け、花背小中学校を中心とした地区間交流、子育て交流会、学童保育、水源の森交流事業（地域情報の発信・定住促進事業）などの事業を実施しています。

#### ココイマプロジェクトの活動

##### 地域間交流事業

##### ～学校は「地域の家」～

平成19年4月、京都初の「施設一体型小中一貫教育校」として花背小中学校が開校しました。

花背小中学校は茅葺屋根を模した特徴的な三角形をしています。

設計の段階で、子どもたちと地域の人たち、先生方と、どういう学校にしたいのかというワークショップを行い、「地域の家」としてデザインされたものです。

校舎の真ん中には、みんなが集える「みんなのリビング」という大きなスペースが配置されていて、1年生から9年生までが先生と一緒に給食を食べる空間となったり、年3回開催される「地域の日」にも、ワークショップの場として活用されています。

「地域の日」とは、花背小中学校とココイマプロジェクトが協働して行っている地域間交流事業の一つです。





地域住民に学校へ足を運んでもらい、児童生徒と住民の交流の機会や学習の機会としての講演会も行っています。

スクールバスを地域バスとして利用できるよう許可を取り、そのバスを利用することで地域住民が学校に来やすい環境をつくり開催しています。

まさしく、花背小中学校は3地区の交流活動の拠点となっているのです。

地域の講師派遣事業もまた、地域間交流のもう一つの柱となっています。



地域の名人に登録してもらい、学校などへ情報提供をしています。特に、学校で行われている「花背学習」(地域を知る学習)の講師として、「狩猟」の名人、「林業」(木)の名人、「郷土料理」の名人など、さまざまな地域の名人をココイマプロジェクトの事務局がコーディネートし、学校と地域をつないでいます。

## 子育て支援事業

### やまの子育て交流会事業

平成20年から、年3回の「やまの子育て交流事業」を行い、そのうち2回は左京区保健センターと合同で健康相談会を開催しています。それまで、保健所に行くには遠いという理由から乳幼児健診の受診率が低く、疾病などの早期発見ができにくいなど大きな問題になっていました。この健康相談会を通して医師との接点を増やすことにつながり、親同士の交流会も開くようになりました。

当初のテーマは左京区保健センター事業として歯科衛生士さんによる「歯磨き指導」や栄養士さんの「栄養指導、調理実習」、地域の伝統食を伝える取り組みなどが行われてきましたが、現在は交流会の部分をココイマプロジェクトで受け継続的に開催しています。



特に最近は、お母さんたちに企画運営を任せ、ケーキ教室やベビーマッサージやアロマ教室、ヨガ教室など自主的な活動の広がりとなっています。

これらの活動も、すべて学校を借り、学校を拠点として活用しています。

## 学童保育事業

昨年度より取り組んでいます。子どもたちの人数は基準以下であるものの、地域や親からの需要はあるので、自主学童保育という形で取り組んでいます。要件緩和もあって、親が働いていない家庭の子どもでも、夏休みの特別企画などにも積極的に参加してもらうことが可能になったり、ワークショップの参加もオープンにして自由参加としています。学校があるときは、随時、必要に応じて受け付けています。

## 放課後まなび事業

学校と連携して、放課後まなび事業のバックアップをココイマプロジェクトがしています。

子育て支援事業は、乳幼児とその親だけではなく、子どもたちの学齢に応じた支援事業を行政の力を借り、さまざまな助成制度等を利用して事業展開をしています。そして、これらも学校施設を拠点としています。

## ココイマのきっかけ

### ～昼間里親「京ベビーハウス堰源」～

桂川の最上流域沿い南北20キロの細長い地域に3つの集落があります。児童館もなく、保健所も遠い。嫁いできた若い母親は地域との接点がなく、孤立しがちになります。

しかも、平成16年12月、地域に一つしかなかった保育園が経営難のため閉園が決まり、保護者達は考えた結果、自分たちで自主保育することも覚悟しました。

親が自ら出資金を出して、当時休校中の学校施設を借り、毎週土日、試験的に子どもたちの世話を交代でする、それが子育て支援団体「山の子応援団うり坊」でした。

この取り組みが、地域でも共感を呼び、また、親同士の強いつながりを作りました。

親たちが行政に、ココで子育てがしたい、どうしたらいいのかという相談をしていった中で、人口は3地区で500人未満であるものの、15歳未満の構成率は11%もあり、子育ての支援が必要な地域であることが判明したのです。

そして、京都市からの提示により、平成18年4月、「昼間里親制度」を利用した「京ベビーハウス堰源」がオープンしました。地域の運営協議会で担い、個人の持ち物ではない運営体制をつくりました。並行して学校統合もあり、保育課と教育委員会が調整し、広河原の廃校でスタートすることになりました。現在は、花背小中学校校舎の一角に移り、在籍乳幼児は13名、他地域の保育所を利用している保護者はいないというほど、地域住民に信頼される存在になっています。



## 出会えたキセキ

### ～主語は「子どもたちのために」～

学校統合をするにあたっては、まず、保護者たちが決断しました。そして、プロジェクト

チームをつくり、どんな学校・地域にしたいのかとビジョン図を作り、地域のためではなく「子どもたちのために」学校統合を認めてほしいと地域に訴えていったのです。

学校統合のけん引役を果たしたのは、まさしく、ココで子育てをしたい、ココで教育を受けさせたいと願う保護者達でした。

その中で、子どもたちのための学校統合は、「三地区平等」を大きなコンセプトとしました。

学校を統合してからは、ココイマプロジェクトの大本である学校運営協議会が設置され、改めて地域のビジョン図をつくり、ワークショップやアンケートなどを行いました。

花背小中学校校区活性化ビジョン策定にあたっては、地域を横断する組織として、各地域の団体代表、消防団、警察、左京区役所などが参画し、また、700を超える意見を集めることができたことも、新たな地域を創造するにふさわしい大きな成果でした。

特筆すべきは、子どもたちの意見をしっかり聞き反映したことです。

アンケートを使って家庭の中で聞いてもらいました。なにより、子どもたちには、今の学校のいいところ、魅力を聞き、各地域の学校の良さを残すことを約束していきました。そして、これらの子どもたちの言葉は、学校運営協議会で策定されたビジョンに全て符合するのです。



つまり、花背小中学校校区活性化ビジョンは子どもたちの言葉でできているのです。

学校統合という変化に不安感を募らせている子どもたちや大人の気持ち、意見を受け止め、イマある残したい大事なものは何なのかを共有していく、粘り強い一つずつの働きかけが、子どもを中心に地域が地域の力を再認識し、新たな地域づくりにつながったと言えるでしょう。

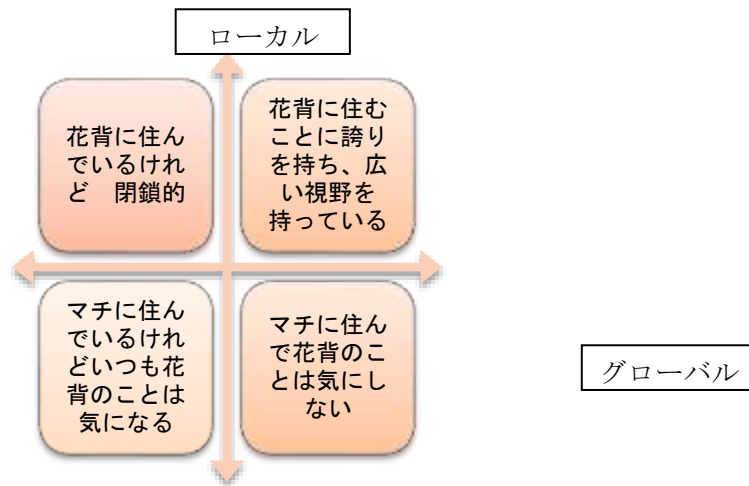
### 「10年たっても、20年たっても『山の中の暮らしがある存在』」

10年先、20年先にある暮らしは次の世代のもの。イマある大事にしたい、有りたい山の中の暮らしを明らかにした「子どもたちの言葉」＝「ビジョン」です。

このビジョンを基に、学校協議会は提言機関、ココイマプロジェクトは実働機関という役割を担うことになりました。できる人が、できるときに、できることからという活動姿勢をもちつつ、地域の課題解決のために、縦割りの行政を横断し粘り強く交渉し、協働していく努力をすること。子どもを中心にいったことで、さまざまな人や組織、空間、時間の「出会いのキセキ」がありました。



「花背の子どもをどう育てるか」をローカル、グローバルの指標に則すと、「花背に住むことに誇りを持ち、広い視野を持っている」と表されます。(図 4-5-1)



(図 4-5-1) 提供：洛峰ココイマプロジェクト

花背の子どもたちは、15歳になると、市内の高校に通うため地域を旅立っていきます。花背小中学校では卒業生を送るお別れキャンプを行っています。子どもたちが主催し、すべてのことを子どもたちが取り仕切るのです。

毎年、そのキャンプには、旅立っていった子どもたちも参加しています。イマは住んではないけれど、彼らの「集う場所」。そして、街に出て視野を広げ成長した彼らの「帰ってくる場所」になっているのです。

花背小中学校の「花背」には地域を示すほかに、「花を背負って立つ子を育む」という願いが込められています。

ココイマプロジェクトは定住促進事業も展開しています。

コンビニもないし、光ファイバー通信もまだ。

でも、街にはない豊かな自然と暖かな人の関係、伝統行事がある。

すでに、定住に関する問い合わせは20件以上ありました。

ココには、子どもを育てたいと思える環境があるのです。

それは、地域住民が子どもを中心に考え、行政を動かし、地域を動かしていった行動の積み重ねに他ならないのです。

インタビュー お話：諏訪亜紀さん

聞き手：竹内香織

田中貴子

安井悠一郎

まとめ：田中貴子

## 第5章 “子どもと一緒につくる” ために

### 事例から見る仮説

本報告では、「子どもと一緒につくる地域コミュニティ」を「多様な市民の社会参画」の一つの姿ととらえ、「子どもの社会参画」「子どもとおとなのパートナーシップ」といったキーワードを軸に事例を紹介した。残念ながら、本調査で紹介した事例も含めて「子どもと一緒につくる地域コミュニティ」はまだまだ発展途上にあり、今後の可能性を模索していかなければならない。

紹介した事例を、目指すべきモデルとしてとらえるのではなく、これから「子どもと一緒につくる地域コミュニティ」をすすめるための課題と展望を明らかにする材料とした。

### 参画の段階を設定する

ロジャー・ハートの「参画の梯子」に照らすならば、行政主導で進められている事業は全国的な数の広がりを作りだしてはいるものの、3段目（形式的参画）や4段目（与えられた役割の内容を確認したうえでの参画）の域を超えていない。調査にあたった学生が「形式的・イベント的なものにすぎない」「どれも似たようなもの」と感じ、「（子どもたちから出た意見を）実際の施策に落とし込むには壁がある」「苦しい立場にある子どもたちの意見は反映されていないのではないだろうか。」と指摘する所以であろう。NPO等が取り組む地域の活動も、7段目（子ども主導の活動）8段目（子ども主導の活動に大人も巻き込む）は成立できていない。

すべての活動が8段目である必要はないが、少なくとも自分たちが取り組む活動が、参画の梯子のどの段を目指すのかを明らかにし、実際にそれが達成できているか検証する必要があるだろう。

そもそも、7段目は「子どもの普段の遊びはほとんどがこれに相当する」という注釈があり、8段目は「子ども主導の活動」のさらに上位であることから、おとなが企画する事業の範疇を超えている。「子どもの普段の遊び」そのものが子どもの日常から失われつつある現在、一足飛びに7段目8段目が展開する状態をつくることはできない。今ある活動をしっかりと創りあげながら、次の段階を目指す足がかりにしていきたい。

### 多様な「子どもの意見表明」を保証する

例えば、子どもたちの遊びに見られる、ルールを理解できないメンバーも巻き込みながら楽しむための工夫や、枠組みをアレンジしていくプロセスも、意見表明といえるだろう。

3-3.で紹介した「こども City・ミニ京都」は、一見すると職業体験や社会の仕組みを学ぶプログラムとも考えられるが、実は「枠組みをアレンジしていくプロセス」を楽しむことを狙いとしている。子どもたちは「こどものまち」で、大人が市長と名乗っているとい



う設定に対して、署名を集めてリコールを行い新しい市長を選挙で選んだ。また別の場面では自分たちの発想で起業したり、店舗の買収など、おとなが想定した枠を超える動きを創りだしている。しかも、「こんな風にしてみたい」と誰かが言い出せば、周囲の子どもは驚くほど柔軟に意見を受けとめ、自らのアイデアを重ねながら嬉々としてよりよいものに変化させていく。

3-1. のKAKEHASHIでは、「やってみたい」「どうしたらいいんだろう?」「この方がいいんじゃない?」という気持ちや気づきそのものが子どもの意見として尊重され、直接プログラムに反映した。サポーターである青年スタッフが「大丈夫か?」と心配した、介護施設での1対1の対話も「大丈夫」「できるよ」という子どもの声で実現している。被災地のお年寄りが笑顔になっていく様子に、子どもたちはそれぞれ充実感、達成感を得て、未来を考える力、生きる力を育んでいることが読みとれる。

3-2. の塔南の園児童館では、中高生が「気持ち」を表現することの難しさや、丁寧な関わりの中で「気持ちが飛び出し、…共感の声も上がる」までのプログラムのマネジメントが語られている。ここではさらに、活動の結果として得られた自己肯定感や役立ち感が新たな活動を生みだしている。

4-5. の洛峰コイマプロジェクトでは、学校統合に向けて「イマの学校のいいところ・残したいもの」を子どもたちが語った言葉が、そのまま地域活性化ビジョンになっている。

意見とは原稿用紙にまとめられたレポートや、パブリックコメント、アンケートに集約されたものや選挙における1票だけではない。子どもたちにとって（おとなでも）「気持ちを言葉にする」ことは難しく、「どんなことでも安心して発言できる」という経験は少ない。気持ちを出せる環境を整え、多様な表現を引き出すチカラ、出てきた意見を尊重し、実際の活動や地域づくりにつなげていくチカラ、これらが「子どもと一緒につくる」ために必要となるマネジメントでありコーディネートであろう。

## 多様な関わりで地域を動かす

4-1. ふれあいフェスタ実施の背景と目的には、なぜ「地域コミュニティーづくり」を「子どもと一緒に」するのかについて、「こどもが『いない』のではなく、子どもは減って来ても『いる』、しかも『地域』の中で育っている。」という端的な言葉で提起されている。

続く4章の事例はすべて、地域にある多様な関わり、人との出会いをつくることの記録であり、子どももおとなもお互いの顔が見えるようになっていく過程を伝えている。

出会いの中では、おとなから子どもへ一方的に伝えたり教えたりするだけではなく、子どもとおとなが言葉のキャッチボールを交わすことや、共に学ぶこと・悩むこと、あるときは子どもから学ぶこと・受け取ることの重要性が記されている。

子どもが変わる、成長する、その姿を間近に感じることで、その場でともに活動するおとなや、活動の支援者も新たな視点を得て成長する。そうした積み重ねが、やがて地域社会の変化に繋がる具体例である。

### パートナーシップを推進する人を育てる

地域社会が人と人のつながりによって、よりよく変化する。「子どもと一緒につくる地域コミュニティ」の活動は、東日本大震災後に日本の各地が本気で模索を始めた「ありたい社会」への道しるべとなる可能性がある。

しかし、これらの活動は多くがボランティアによって支えられている。

「子どもと一緒につくる地域コミュニティ」を豊かに展開するためには、一緒につくる質を保証し、活動の準備をするファシリテーター／コーディネーター／マネージャーの役割をする人がもっとも必要である。しかしながら、そういう人が育っていくために必要な情報や子どもとの関わり方を伝達していく場は、ごく限られている。京都市内でプログラムとして確立されているのは、公益財団法人京都市ユースサービス協会が提供するユースワーカー養成講座以外に見当たらない。仕事としては、児童館職員の一部が担い手となっているのみであろう。

全国的には、遊びの場づくり、フリースクールもふくめたオルタナティブスクール、寺子屋活動など学習支援的な要素を取り入れた分野のNPOやソーシャルビジネスを志す人の中に、雇用のあるケースもわずかに生まれてきてはいるが、圧倒的多数は学生や主婦層、あるいは活動の他に本業をもつ人が、いわゆる手弁当で取り組んでいるのが実態である。

また、ボランティア協会等の職員、大学の教職員、京都市ではまちづくりアドバイザーが、モデルづくりや調査研究の一環で関わることもあるが、多くは単年度事業で立ち上げを行い、継続は地域のボランティアにゆだねられる。

子どもの参画をサポートし、地域の資源をコーディネートする活動が、意味のある、継続する価値のある「仕事」のひとつの領域であるということが認識され、社会に広がっていかなければ、「子どもと一緒につくるコミュニティ」の展開は望めないだろう。

### 「子どもと一緒につくる地域コミュニティ」が豊かに広がるために

京都子どもセンターは、子どもたちひとりひとりがもつ「すばらしいチカラ」を信じて、それが存分に表現できるような環境を整えて待つ、ありのままの「今」を受けとめる姿勢を大切に活動してきた。そのような姿勢で子どもに関わる人が地域に増えることが、地域をつくることだと提起してきた。

この報告書で、京都子どもセンターにつながりのある団体や地域から具体的な事例として紹介されたことが、京都の各地で質的にも量的にも豊かに広がることを期待している。

そのためには、小さな規模でも「子どもと一緒につくる」（あるいは「子どもに任せてつくる」）活動の機会が増えること。コーディネートやマネジメントなど活動を支える人が育つこと。成果や課題を共有し、情報を蓄積する仕組みが整備されること。これら3点の必要性が、今、求められているのである。

## おわりに

2012年10月、宮城県石巻市で開催された「子どものまち・いしのまき」の様子を見せていただきました。

旧北上川の河口に沿って津波の爪痕が残る商店街の外れに、カバン屋さんの古いお店があり、奥にはおばあさんがひとり座っていました。

「普段は人通りも少ない」という商店街を、3～4人の男の子が大きな声をあげ、笑いながら走り抜けていきます。おばあさんは店の戸を開けて、子どもたちの後ろ姿を眺めながら、小さな声で「い～いねえ～。子どもの声は」とつぶやき目を細めていました。

復興復興というけれど、ホントの復興はコレなんじゃないかなあ～。

子どもの姿を見ておばあちゃんがちょっとだけ笑う。そういうちょっとの時間が、本当に必要な復興につながってるんじゃないかなあ。

何の脈絡も根拠もないけれど、現場へ行って強く感じたのはそんなことでした。

東日本大震災の被災地には、公益社団法人セーブ・ザ・チルドレン・ジャパンが「こどもものまち」を、特定非営利活動法人日本冒険遊び場づくり協会（IPA-Japan）が「冒険遊び場づくり」のプログラムを提供しています。その他にもたくさんの居場所づくり・遊び場づくりが、草の根の活動でひろがっています。多くは、遊べる環境すらない被災地の子どもを支援する動きとしてはじまったのですが、2年が経過した現在、まちの復興・再生そのものに子どもが参画するためのプロジェクトという位置づけもうまれています。

地域コミュニティづくりを子どもと一緒にこなう「子どもをパートナーと位置づける」ことの意味は、本文中にも繰り返し出てきましたが、私自身はロジャー・ハート氏の「子どもは、社会の構成員として、市民として、大人のパートナーとして地域づくりに主体的に参画する能力があり大人にはない力を発揮する。」という言葉がいちばんしっくりするように感じています。

「子どもの持つ力」、特に「今・この場を楽しむチカラ」「周囲を笑顔にするチカラ」を存分に発揮してもらったほうが、地域づくりのプロセスそのものが断然楽しくなるだろうし、子どもだけでなくよりたくさんの人を巻き込む可能性がひろがるでしょう。

今回の報告書では、主に子どもの遊びの事例を取り上げましたが、遊びではあっても、めんどくさいこと・イヤになってしまう場面はたくさんあります。それでも、めんどくさいこと・イヤになってしまう場面や予想外の障害を乗り越えながら「やりきった」「楽しかった」と言える体験をすることが、自己尊重感を育て、他者とかかわる喜びにつながるのです。これは調査や事例の結果…というより自分自身の体験談としての話でもあります。

他には置き換えが効かない「参画の体験」を、たくさん子どもたちが、たくさん地域で楽しめるよう、本報告書が「子どもと一緒につくる地域コミュニティ」の推進にわずかでも寄与できれば幸いです。

本報告書作成にあたっては、正会員団体の皆様をはじめとして、京都でつながりのある皆様に、取材・資料提供・執筆・編集会議など様々な場面でご協力いただき、修正や改善のための貴重なご意見を頂戴しました。また、京都子どもセンターの理事、事業責任者やインターンには、多くの時間を割いて執筆・編集にあたってくださいました。

片桐直哉さんには、政務調査報告という形で地域の活動や京都子どもセンターの理念をまとめる好機を与えていただき、片桐直哉事務所スタッフ、特定非営利活動法人場とつながりラボhome's viスタッフの皆さまに、完成まで、あたたかい励ましで支えていただきました。

私ごとになりますが、執筆中には「完成したら読んでもらいたい」と思うたくさんの方々のお顔を思い浮かべることで書き進めることができました。

心から感謝いたしますとともに厚くお礼申し上げます。

NPO法人京都子どもセンター  
理事長 竹内 香織

参考文献 (各章で紹介したものを除く)

- ・ 「子どもの参加/参画」実践の普及促進のための調査事業報告書, 2005, NPO 法人青少年育成支援フォーラム (JIYD)
- ・ 地域で子どもを育てようスクラムプラン推進委員会 (京都府教育庁指導部社会教育課内)
- ・ 子どもをはぐくむ地域のきずな～平成 17 年度地域教育力再生プラン事業報告書～, 2006, 京都府
- ・ 地域の民間団体による「子どもの居場所」づくりに関する調査研究報告書, 2006, 地域子ども教室 全国民間団体運営連絡協議会
- ・ 青少年活動事例集 第 6 集「青少年を支援する活動」, 2006, 財団法人京都ユースホステル協会
- ・ ユースワーカーハンドブック, 2006, ユースサービス (財団法人大阪府青少年活動財団)
- ・ 平成 18 年度青少年ボランティア活動等促進連絡協議会報告書, 2007, 文部科学省スポーツ・青少年局

編集・執筆

池田英郎／塔南の園児童館

勝村尚代／ミニ京都実行委員会

朱まり子／NPO 法人山科醍醐こどものひろば 町たんけんチーム 代表

竹内香織／NPO 法人京都子どもセンター

田中貴子／NPO 法人京都子どもセンター

土江京／学生ボランティア

中道秀貴／NPO 法人京都子どもセンター

三好 英／NPO 法人京都八幡こどものひろば

村井繁光／(公財) 京都市ユースサービス協会

安井悠一郎／学生ボランティア

山田光瑠／学生ボランティア

米原裕太郎／ミニ京都実行委員会

京都子どもセンターは、子どもたちが社会体験や社会参画の機会をひろげ、のびやかで豊かな「子ども時代」を過ごすことができる環境づくりを目指しています。「子どもの権利条約」の精神にもとづいて、子どもを社会の一員として位置付け、その尊厳を保障するように提起し、子どもと大人が対等な関係に立って社会に向けて活動を創り出すことが、社会全体を変える力になると確信しています。



特定非営利活動法人京都子どもセンター

〒604-8166

京都市中京区三条通烏丸西入御倉町 85-1

烏丸ビル2階 Flag 三条

TEL.075-254-8114 FAX.075-254-8115

E-mail:info@kodomo-doki.org

URL:<http://kodomo-doki.org>

Facebook